

# 史跡上野国分寺跡

## 発掘調査概要 8



63
160

1987

群馬県教育委員会

## 序

県が重要施策の一つとして進めている史跡上野国分寺跡の保存整備事業に伴う発掘調査も8年目を迎えました。今年度は寺域の北東隅と北西部分の調査を行い、国分寺の建物跡などは確認できませんでした。室町時代頃にこの場所に住んだ人々の家の跡や使用した土器などが多数発見されました。国分寺が減じた後も、この地域では人々の活発な生活が営まれていたことがよくわかります。今年度はこのような発掘調査の成果を活かした、史跡整備を行うための基本設計を作成しました。今後はこれに即して、これまでのものとは一味違った史跡整備を目指して、実施設計・整備工事へと進めていく所存です。

今年度の調査の概要を紹介し、今後の事業を進める一助として本書を刊行しました。広く皆様にご活用いただき、史跡に対するご理解を深めていただく手掛りとなれば幸いです。

おわりに、本事業を進めるにあたって多大なご指導とご協力を賜った文化庁、地元教育委員会などの各機関、また地元の皆様をはじめとする多くの方々に衷心より謝意を表する次第です。

昭和63年3月31日

群馬県教育委員会教育長 千吉良 覚

## 目 次

I 遺跡の位置と立地環境……………	1	IV 調査の概要……………	12
1. 位 置……………	1	1. 目的および調査方法……………	12
2. 立地環境……………	2	2. 調査の経過……………	14
II 調査に至る経過……………	4	3. 第33次調査……………	15
III 昭和55～61年度調査の概要……………	4	(1) 遺 構……………	15
1. これまでの調査と研究……………	4	(2) 遺 物……………	20
2. 昭和55年度の調査……………	6	4. 第34次調査……………	26
3. 昭和56年度の調査……………	6	(1) 遺 構……………	26
4. 昭和57年度の調査……………	7	(2) 遺 物……………	30
5. 昭和58年度の調査……………	8	V 文 字 瓦……………	32
6. 昭和59年度の調査……………	9	VI ま と め……………	34
7. 昭和60年度の調査……………	10	図 版……………	36
8. 昭和61年度の調査……………	11		

## 例 言

1. 本書は、群馬県群馬郡群馬町大字東国分・同引間、前橋市元総社町に所在する史跡上野国分寺跡の、昭和62年度保存整備事業に伴う発掘調査の概要である。
2. 本調査は、国庫補助事業として群馬県教育委員会が実施した。
3. 本調査は、史跡上野国分寺跡整備委員会の指導を受け、群馬県教育委員会文化財保護課専門員前沢和之および調査補助員関口功一が担当し実施した。
4. 出土した遺物は群馬県教育委員会が保管している。
5. 本書の作成、編集は前沢が担当し、遺構実測・写真撮影は前沢他が担当した。遺物実測および実測図トレースは関口他が担当した。

## 史跡上野国分寺跡整備委員会委員・幹事

委員	大関軍之丞(委員長・県文化財保護審議会委員)	幹事	田中 哲雄(奈良国立文化財研究所技官・史跡整備)
	坪井 清足(副委員長・前奈良国立文化財研究所長)		福田 拓(造園家)
	大塚 初重(明治大学教授・考古学)		松島 栄治(県立前橋第二高等学校教諭・考古学)
	平野 邦雄(東京女子大学教授・古代史)		井上 唯雄(県埋蔵文化財調査センター所長)
	近藤 義雄(県文化財保護審議会委員・中世史)		関根 宏一(県総務部財政課総括課長補佐)
	藤嶋 清多(前橋市長)		青柳 健二(県土木部都市施設課課長補佐)
	志村喜三郎(群馬町長)		岡田 久雄(県都市公園事務所長)
	女屋 覚元(県総務部長)		梅沢 重昭(県教育委員会文化財保護課長)
	柳沢 宏(県土木部長)		神保 侑史(同 埋蔵文化財第2係長)
	千吉良 覚(県教育委員会教育長)		前沢 和之(同 専門員)
	入沢 哲夫(県教育委員会管理部長)	退任	富田 敏彦(前県総務部財政課総括課長補佐)
退任	故藤井精一(前前橋市長・昭和63年1月11日逝去)		矢沢 隆資(前県都市公園事務所長)
	福島 正巳(前県教育委員会管理部長)		原田 恒弘(前県教育委員会文化財保護課埋蔵文化財第2係長)

# I 遺跡の位置と立地環境

## 1. 位置

関東平野の北西隅、前橋市街地の西方約4kmで、群馬郡群馬町大字東国分字村前、同大字引間字妙見・字石堂、前橋市元総社町字小見に跨る位置にある。地形的には榛名山東南麓に広がる扇状地の末端にあたり、南を染谷川、北を牛池川に挟まれる北西から南東への緩い傾斜を示す微高台地上に立地する。寺域の北西部は標高129.0m、南東部は127.5mを測る。西から妙義・浅間・榛名・小野子・子持・武尊・赤城の山々を望み、南東には平野が広がる景観をもつ。

史跡地の北側には町道、東と西側には小道が接しており、南にはテラス状の平坦地が約100m続いて染谷川の段丘に至る。北側には群馬町東国分の集落が近接するが、南・東・西方は畑と水田で家屋は少なく、比較的良好な環境が保たれている。寺域内は北半部に民家と墓地があり（移転済み）、中央部に金堂と塔跡が壇状に残る以外は畑地であり、かつては桑園が多くあった。

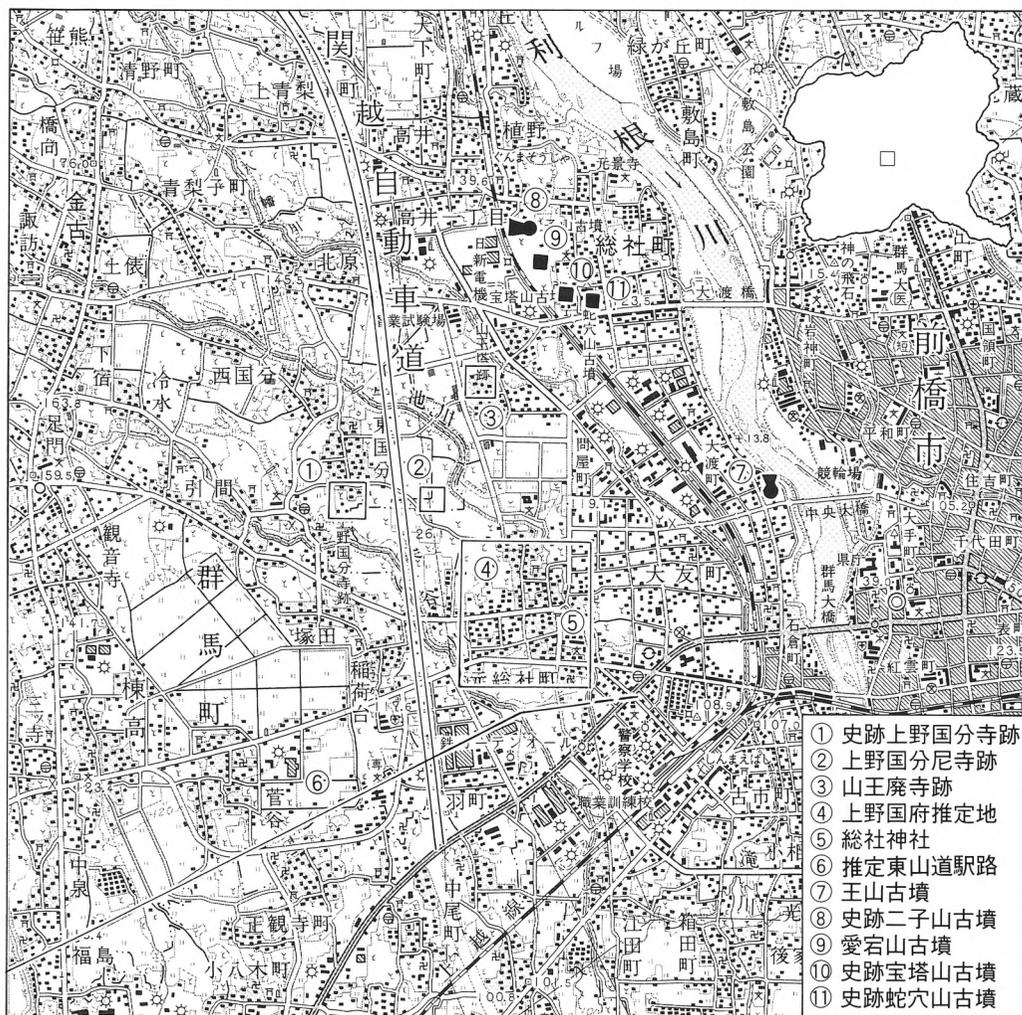


Fig. 1 史跡上野国分寺跡と周辺の遺跡 1/50,000

## 2. 立地環境

国分寺は律令制度下の「群馬郡」の中部域に建立された。「群馬」は「久留末（くるま）」と呼ばれており、藤原宮跡（7世紀末）出土の木簡に「上毛野国車評桃井里」とあることから、古くは「車」と表記されていたことがわかる。国分寺の南西3.5kmには5世紀後期～6世紀前期の地域首長の城館跡である三ツ寺Ⅰ遺跡と、その墳墓と考えられる3基の100m前後の前方後円墳からなる保渡田古墳群がある。また東～北東2.5kmには6世紀前期の横穴式石室をもつ前方後円墳である山王古墳から、7世紀末の大型方墳である蛇穴山古墳に至る総社古墳群がある。この古墳群はその規模と構造から、上毛野地域の最有力勢力によって築造されたものとみられる。北東1kmには7世紀後半に創建された山王廃寺がある。ここには精巧な造りの地下式塔心礎や石製鴟尾・根卷石が残っており、「放光寺」とヘラ書きされた瓦が出土している。南側2kmには東山道駅路の痕跡とみられる東西に延びる直線の地割があり、発掘調査により平安時代以前の道路の跡であることが確認されている。このように国分寺が建立されたのは、5世紀後期以降上毛野地域の中でも有力な勢力が在り、またヤマト・畿内との結びつきが強かった地域であるとみることができる。

国分寺の東方約500mの群馬郡群馬町大字東国分字礎に国分尼寺跡がある。以前から礎石の存



Fig. 2 史跡上野国分寺跡全景（昭和56年3月撮影）

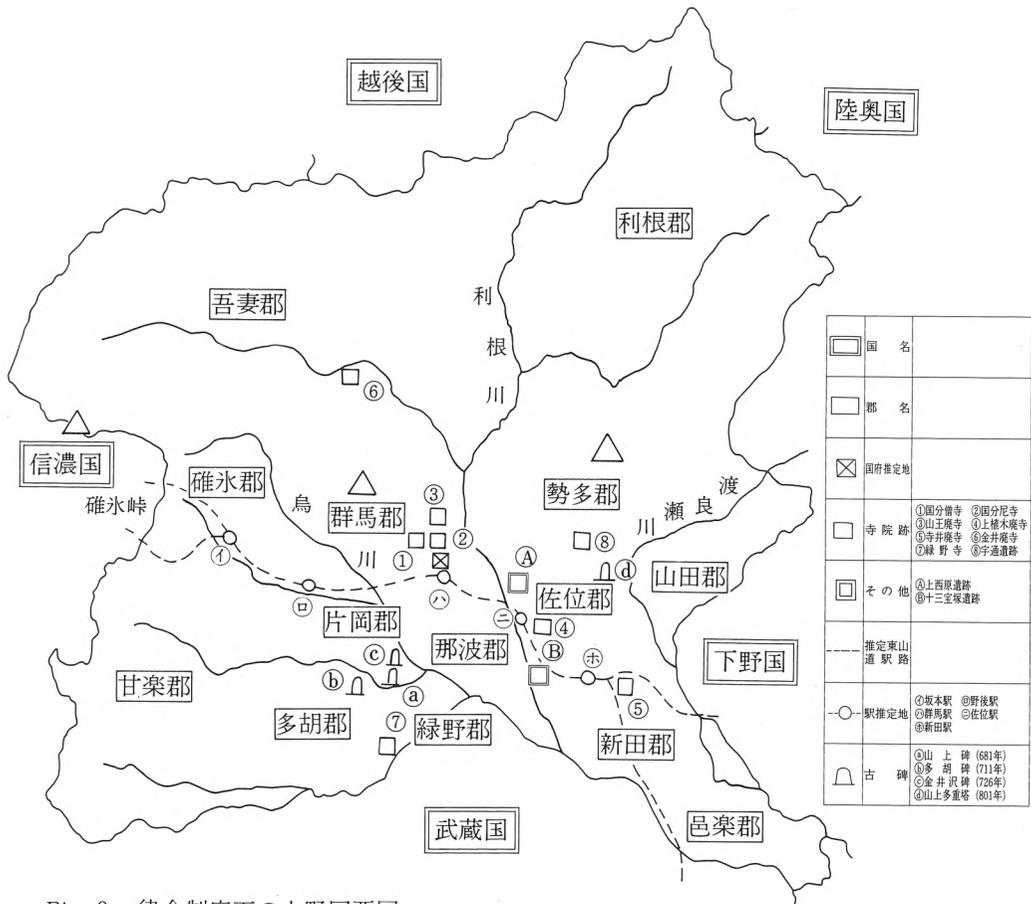


Fig. 3 律令制度下の上野国要図

在や国分寺と同型の瓦の出土が知られていたが、昭和45年に行われた調査で6×4間の講堂と推定される礎石建物と、その南側に金堂と中門の跡とみられる基壇状の高まりなどが確認された。伽藍配置・寺域の範囲については不明な点が多いが、現在は畑地となっており比較的良好な環境を保っているため、今後調査が行われればそれらも明らかにされるものとみられる。南東1.4kmの前橋市元総社町には国府推定地がある。市街地化が進んでいるが、総社神社が鎮座し、またその故地とされる小祠などがある。南面には推定東山道駅路に接して人為的とみられる段差のあるのが認められる。都市計画に伴う調査が行われており、溝などの遺構の確認もなされているが、規模や建物の配置状況については不明である。今後組織的な調査の実施が期待されている。国分寺と尼寺の間を南北に貫くように建設された関越自動車道路線敷の発掘調査では、縄文時代から近世までの各時代の遺構が検出されたが、奈良～平安時代の集落跡も多く確認されている。そこから出土した瓦や石材、「法華寺」と墨書された土器などの遺物と併せて、国分二寺の立地や変遷と密接な関連のあったことがわかる。これらの遺跡の所在から、国分二寺が建立された一帯は律令制度下における上野国の中枢部をなしていたことが知られる。

## Ⅱ 調査に至る経過

上野国分寺跡は、平安時代中頃の記録が残る稀有な遺跡として知られており、大正15年10月20日付で内務省より史跡に指定された。指定面積は62,092㎡で寺域の南面外側部分も含んでいる。昭和43年に関越自動車道の基本計画が、その翌年には整備計画が発表されたが、それによるとこの自動車道は国分寺跡の東側約150mのところを南北に走り、南東約2kmのところには前橋インターチェンジができることになった。この開通により国分寺周辺への開発の波及は必至の情勢となり、群馬県教育委員会では史跡の保護のため指定地の公有化を検討し、昭和47年度から地権者との折衝を開始した。その結果、史跡上野国分寺跡土地買上事業は昭和48年度から開始され、以後昭和62年度までに総事業費11億1,922万円、買上面積は51,463㎡で全体の82.9%となった。

この史跡地の買上事業の進展に伴い、昭和55年度から史跡上野国分寺跡整備委員会を発足させるとともに、遺構を確認し保存整備に必要な各種の資料を得るための発掘調査に着手した。

## Ⅲ 昭和55～61年度調査の概要

### 1. これまでの調査と研究

国分二寺（僧寺・尼寺）は天平13年（741）に建立が命じられたが、寺地の占定や工事は難航したようである。そのような状況の中で天平19年（747）に再び詔が発せられ、国司らに対しての督促がなされるとともに、地方の有力者である郡司層の力に拠って早期に完工することが目論まれた。それによると3年以内に塔・金堂・僧坊を完成させたならば、その子孫は代々郡領（郡の長官・次官）に任用するとの条件が出された。『続日本紀』天平感宝元年（749）紀には、この詔に対応する記事と看做される、国分寺に知識物を献じたことによる叙位が5例記されている。その内の2つが上野国分寺関係で、碓氷郡の石上部君諸弟と勢多郡少領の上毛野朝臣足人の名が掲げられている。このことから上野国分寺は749年頃には伽藍の主要部分が完成していたものと推定され、全国の国分寺の中でも最も早期に一応の姿を整えたものの1つとみることができる。また長元3年（1030）に作成された「上野国交替実録帳」には、1020年頃の上野国分寺の衰退の状況がかなり詳細に記されている。それによると本尊である釈迦丈六、脇土の普賢菩薩と文殊師利菩薩、四天王、吉祥天、毘沙門天などの諸像は破損はあるものの良好な姿をとどめている。また長保3年（1001）に出された官符にもとづいて国司が丈六十一面観音像を造り、金堂に安置したとの記録がみえることから、金堂はまだ健全な状態にあったものとみられる。これに対して周辺の築垣や南大門、東大門、西大門、萱葺僧房、大衆院などの建物は無実（減失）となっていたことが記されている。これによって創建から約270年を経た時期には、伽藍の中心部に較べて、縁辺部の荒廃が進んでいたことが知られる。またこの文書には国府に保管されていた度縁と戒牒各30枚、省符30枚が既に無実となっていたことが記されているが、それらはその内訳が各々僧20人、尼10人分とされていることから、国分二寺の僧尼に係わるものとみられる。このように上野国分寺は創建期と衰退期に関する史料が残されている稀有な例として注目されてきた。

上野国分寺についての研究は福島武雄「上野国々分僧寺址考」（「上毛及上毛上人」53号 1921

年)が嚆矢であり、現在地を僧寺跡に当て、現在の尼寺跡もその範囲と想定した。これによれば東西7町・南北4町で、主要伽藍は現在地に、僧房・雑屋が現尼寺跡にあると推定された。また尼寺は山王廃寺跡に比定された。宮地直一「上野国分寺に就いて(上)・(下)」(『史蹟名勝天然記念物』第1集 第2・3号 1926年)では「上野国交替実録帳」をとり上げ、その内容の検討と現地の状況とを照合する研究がなされた。その後、相川龍雄「上野国分寺」(『国分寺の研究』所収 1938年)、太田静六他「上野国分寺伽藍の研究」(『建築学会論文集』27号 1942年)、太田「上野国分寺伽藍の諸性質(上)・(下)」(『史蹟名勝天然記念物』第18集 第8・9号 1943年)では詳細な現地調査により金堂・塔などの規模の復元、伽藍配置と規模の推定などが行われ、現在に至る研究の基礎が作られた。また指定に伴う調査報告として内務省「上野国分寺址」(『埼玉茨城群馬三県下における指定史蹟』1927年)、群馬県「上野国分寺址」(『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1輯 1929年)があり、当時の現況が詳細に記されている。この他には尾崎喜左雄「上野国上代寺院についての一考察」(群馬大学「史学会会報」第3輯 1949年)、石田茂作「東大寺と国分寺」(至文堂 1959年)、「上野国分寺」(『前橋市史』第1巻 1971年)、前沢和之「上野国交替実録帳」国分寺項について」(『群馬県立歴史博物館紀要』1号 1980年)、前沢・関口功一「群馬県 史跡上野国分寺跡」(『日本考古学年報』37 1984年度版 1986年)、桜場一寿「上野国分寺」(『群馬県史 資料編2』1987年)などがある。また出土遺物については文字瓦を中心に、秋山吉次郎「国分寺址より出でし文字瓦に就いて」(『上毛及上毛人』77号 1923年)、相川龍雄『上野国分寺文字瓦譜』(1934年)、住谷修「上野古瓦文字考(上)・(中)・(下)」(『上毛及上毛人』218・219・220号 1935年)、相川「上野国分寺瓦の考察」(『考古学雑誌』第33巻第12号 1934年)、前沢「文化財レポート 史跡上野国分寺跡出土の文字瓦について」(『日本歴史』454号 1986年)、関口「上野国分僧寺金堂基壇中出土瓦について」(『東国史論』第1号 1986年)などの報告と論考が発表されている。

上野国分寺に関するこれまでの発掘調査としては、北側の町道の拡幅に関連して南辺築垣の位置を確認するための調査が行なわれた(群馬町教育委員会『群馬町埋蔵文化財調査報告第1集 上野国分寺寺域縁辺の調査』1975年)のみである。周辺の調査としては、関越自動車道路線域の予備調査で僧寺と尼寺の間から「東院」の墨書のある須恵器が出土した(群馬県教育委員会『上野国分寺周辺地域発掘調査報告—僧寺・尼寺中間地域の考古学的検討』1971年)、また現状変更に伴う調査で史跡地西側の小道の西方において明らかに寺域外を示す状況が確認された(群馬県教育委員会『上野国分寺隣接地域発掘調査報告 奈良平安時代の堅穴住居跡等の調査』1979年)などがある。尼寺跡の調査報告としては群馬県教育委員会『上野国分尼寺跡発掘調査報告書(昭和44年調査概要)』(1970年)、同『同(昭和45年度調査概要)』(1971年)がある。現在資料の整理が進められている、関越自動車道路線敷地の調査報告として『上野国分僧寺・尼寺中間地域(1)』(財群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987年)が刊行されたが、国分二寺周辺の15世紀前後の状況について、総社長尾氏に係わる城館や寺院の存在が指摘されている。

## 2. 昭和55年度の調査

寺域および主要伽藍の配置の確認を目的とし、全域に第1～11トレンチ（幅3m）を設定して実施した。

**遺構** 確認された主な遺構の概要は次の通りである。

- ① 第1、9トレンチのS96～101で南辺築垣（SF01）が確認された。基底幅4.8～6m、上端幅（現状）1.5mで、高さは寺域内から0.7～1.4m、寺域外から1.3～1.8mを測り、断面は台形状を呈す。地山を削り出し、その上に粘性のある黒褐色土を積んで造っているが、版築の状況は見られない。南側に接して幅約3.6mの浅い溝（SD01）がある。築垣の北側には瓦片を包含する層があり、この上に浅間山噴出のB軽石（以後、B軽石と略す）の純層堆積が認められた。
- ② 第11トレンチの塔跡に近い位置に瓦の集積があり、W1～3では8世紀後半の竪穴住居（SJ01）が検出された。また寺域の中央部を南北に走る細長い窪地は、深さ約2mの溝状に掘られたものであることが確認され、底部から五輪塔・馬骨などが出土した。

**遺物** コンテナバット200個分が出土した。その大部分は瓦であるが、奈良～平安時代の土師器・須恵器・中世土器も出土しており、特に奈良三彩片の出土したことが注目される。

発掘調査と併せて、金堂・塔跡の現況実測図（1/50）の作成、航空測量用写真の撮影を実施した。これらの成果は『史跡上野国分寺跡—寺域確認発掘調査概要—』にまとめて発表した。

## 3. 昭和56年度の調査

金堂周辺と東半部に第12～15トレンチ（幅3m）を設定し、検出状況に応じて拡張を行った。

**遺構** 確認された主な遺構の概要は次の通りである。

- ① 第5トレンチN17・E132で100×70cmで上面が平坦な自然石1個を検出した。これは『史蹟調査報告第二』（内務省 1927年）などに記録されている礎石と同一とみられ、道路を挟んで東側にも同様な石の存在することが確認されている、金堂中心との距離が106.8mを測る、などの点から、これを東大門西側柱列の礎石の1つと推定した。このことから東辺築垣は金堂中心から1町の位置に在り、史跡地の東側に沿う農道がその痕跡であると想定された。
- ② 金堂の北側～史跡地北辺の第12トレンチでは、地山を浅く掘り込み、周縁に玉石が散在する径約90cmの円形の掘形を2ヶ所で検出した。これを周辺の7ヶ所の円形掘形と玉石集積とを併せて検討した結果、中央部の間口420cm、その両側が390cm、奥行は4間で330cm等間、中軸線は金堂とほぼ一致することがわかり、これを講堂跡（SB06）と推定した。金堂とは中心—中心で4,710cmを測る。桁行の両側部分は攪乱のため検出できず、また基壇の痕跡も確認できなかった。
- ③ 塔跡東側の第11トレンチを拡張し、S9・W1で径約80cmの円形土壌内に玉石が密集してあるのを検出した。金堂の西側柱列から14.5mの位置にあり、西面回廊の礎石根石の可能性もある。
- ④ 塔跡と中軸線を挟んで東に相対する第15トレンチでは、地山が窪地状となっており、夥しい量の瓦が山積み状にあった。この中には壁土・漆喰片・木炭片が混じり、下部からは溝状の切り

込みをもつ凝灰岩切石が出土したことから、建物の部材が廃棄された状況が想定された。

**遺物** 瓦を主に、コンテナバット700個分がある。土器片では奈良三彩片、「福」と墨書する須恵器碗、内面に輪宝を墨書する中世の素焼きの皿、また円面硯・瓦塔片などがある。文字瓦は300点近くあった。石造物は宝篋印塔・五輪塔など70点の出土をみた。

発掘調査に併せて、航空測量による地形図（1/200、1/500）を作成した。これらの成果は『史跡上野国分寺跡発掘調査概要2』にまとめて発表した。

#### 4. 昭和57年度の調査

第16～19次調査を、寺域南東隅周辺の確認、塔基壇と西面回廊の確認を目的として行った。

**遺構** 確認された主な遺構の概要は次の通りである。

① 第16次調査は南辺築垣（S F 01）と東辺築垣との交点と推定される部分とその南側で行った。地山はS 100～101で階段状に削られ、南に向かって次第に低くなっていく。これは築垣基部の造作とみられるが、この南側は染谷川に向って広がる谷地形となっている。この谷地の土層の中位にはB軽石の純層堆積があり、谷地の縁辺部には踏み固められた状況があって、B軽石堆積以前に改修がなされていたとみられる。以上のことからこの谷の北縁上を南辺として寺地の占定がなされたことが窺える。

② 塔跡南東側の第17次調査では、一帯に軽石混黒褐色粘質土の盛土があり、これがW12～13を境として塔跡寄りでは一段低くなっており、一面に瓦片と土器類が散布している状況が確認された。W 7～10で金堂と方位を同じくする梁行2間（3.45m）の掘立柱建物（S B 09）9間分が検出され、西面回廊の一部である可能性が考えられたが、南面回廊の部分は確認できなかった。

③ 金堂跡西側の第18次調査では、S B 09の北側への延長および金堂への屈曲部は検出されなかった。N 5・W 7付近で2×3間の掘立柱建物（S B 08）を検出し、また塔跡の北東約23mで竪穴式住居1軒（S J 08）を検出した。金堂の西側の部分には中世に属する墓壇7基があり、国分寺廃絶後金堂周辺が墓域化していたことを窺わせる。

④ 第19次調査では塔基壇の規模と構造の確認を目的とした。この結果、基壇は一辺長1,920cm（64尺）、側柱列からの出は420cm（14尺）で、旧表土を掘り込んで版築状に盛土をし、標高129.00mを基部として角閃石安山岩切石を積み上げて側面の化粧をしている。礎石上面は標高130.25～130.34mであることから、基壇の高さは120cm（4尺）前後であるとみられる。また基壇は現状では南と西に広がっているが、これは後代の堆積と明治期の盛土であり、塔院に関する基壇ではないことが判明した。

**遺物** 瓦を主に、コンテナバット1,800個分が出土し、特に塔跡付近出土の軒丸瓦の中で素弁八弁で花卉が楕円形状となるものの量の多いことが注目された。

これらの成果は『史跡上野国分寺跡発掘調査概要3』にまとめて発表した。また発掘調査に併せて「史跡上野国分寺跡整備基本計画」を委託して作成した。

## 5. 昭和58年度の調査

第12トレンチ拡張・第20～23次調査を、僧房および寺域北辺部の状況確認、南大門の確認などを目的として行った。

**遺構** 確認された主な遺構の概要は次の通りである。

① 第20次調査は寺域北部で行った。僧房については「上野国交替実録帳」金光明寺項に「萱葺僧房壹宇 長拾伍丈 広弐丈 高柒尺」とあり、寛仁4年(1020)には既に滅失していたことがわかる。金堂と寺域北辺の間で僧房推定地の調査を進めたが、調査区全体で礫混り灰色砂(地山)まで削平が進んでおり、僧房および雑舎などの遺存は認められず、奈良～平安時代の遺構としては井戸遺構1基(SE04)を確認したのみである。この地山上面には北西から南東に向かう流水の痕跡が認められ、その上部にはこれによる砂礫の堆積がみられた。この流水がどの時期のものであるかは明確にし難いが、包含される土器から中世～近世であるとみられ、これのために国分寺存続期の構造物が造られた表土層は流失している。

② 第21次調査は史跡地北西隅の墓地跡で、金堂中心から1町の線上(N133.9)にかかる位置で行った。ここは周辺より一段高い地形となっており、築垣の遺存することが期待されたが、地表下20cm程度で砂質土の地山となっていた。このため築垣は残存していなかったが、N130から北側が僅かに高くなり、N136から北に向って急に低くなっている状況が検出された。最終的には金堂中軸線から北側へ1町の位置で、現在道路舗装の下にあると伝えられる北大門礎石の確認をまたねばならないが、北辺築垣は金堂中心から1町の位置にある可能性が高いと判断された。

③ 第23次調査は南大門の確認を目的として行ったが、東側妻の礎石3個と基壇、それに取りつく南辺築垣などが検出された。礎石は両端の心心距離が630cmで、南辺築垣の東半分はこの中心部に取りつく。築垣は地山を削り出した上、基部幅200cmで粘質土を1単位3～5cmで版築様に積み上げている状況が認められた。また1ヶ所のみであるが寄柱とみられる柱穴1対を検出した。この調査の結果から、(イ)南大門で検出された礎石の方位は南辺築垣の方位と約4°の振れをもち、塔とほぼ同方向を示す、(ロ)現状の礎石による奥行きは630cm(21尺)であるが、これは「上野国交替実録帳」の記載と異なる、(ハ)南大門基壇は改修の行われた形跡があり、古い段階では南辺築垣と方向を同じくするものとみられる、(ニ)南辺築垣の西半部は東半部に対して北側に振れる方位をもつ可能性がある、(ホ)これまでの伽藍配置の想定と異なり、南大門は南辺築垣から内側に入った位置に造られていた状況は認められない、(ヘ)南大門の東約28mの所に方位を同じくする680×560cmで南北に長い基壇とみられる遺構がある、などの点が確認された。

**遺物** 瓦を主に、コンテナバット300個分以上が出土した。南大門周辺には瓦溜があり、多数の文字瓦が出土したが、この中に「郷名+姓+名」および「郷名+名」の形式で書かれたものがあり、郷名は1字に省略されたものもある。また「物部」・「大伴」などの人名、「山字」・「辛科」・「八田」など多胡郡に関する郷名の多いことが注目された。

これらの成果は『史跡上野国分寺跡発掘調査概要4』にまとめて発表した。

## 6. 昭和59年度の調査

第23次西拡張・第15トレンチ拡張・第24～26次調査を、寺域南西隅部の遺構と南辺築垣の状況、金堂基壇の規模と構造、金堂北西方の遺構の状況の確認を目的として行った。

**遺構** 確認された主な遺構の概要は次の通りである。

- ① 第15トレンチ拡張調査は、昭和56年度の第15トレンチを南側に拡張して実施した。S 15～20・E 80～88で瓦溜の南半部を確認したが、これにより瓦溜は南北約11m・東西約8mの範囲に、中心部の厚さ約70cmで周辺が薄くなる山盛り状の堆積を示すことが明らかとなった。瓦片は焼土、壁土塊、漆喰片を含む暗褐色土中に乱雑な状態で積み重なるようにしてある。この中には瓦完形品、鬼瓦、塑像片、凝灰岩切石、土師器坏および内耳鍋形土器、石臼などが含まれることから、建造物の残骸を窪地に投棄したもので、その時期は中世であるとみられた。また出土遺物の内容および位置から、金堂の残骸の可能性が想定された。このほかには、瓦溜の南側で9世紀前半の竪穴式住居1軒（S J 15）、東側約12mで北西から南東に向かう国分寺存続期の「V」型溝（S D 04）と中世の井戸遺構（S E 08）が検出された。
- ② 第24次調査では、S 87.6～90・E 60～64.4で南辺築垣の残部を検出したが、築土の中に含まれる土器片から、平安時代に修造の行われたことがわかる。この北側には10世紀初め頃の竪穴式住居が2軒（S J 13・14）があり、床面上に平瓦の完形品が並べられていることから、この修造に関連したものである可能性がある。またS 51～56・W 70～75で2×2間の掘立柱建物（S B 11）を検出したが、長方形の柱穴掘形をもち、東西妻側の中柱には蜂巢石が礎石状に据えられている。この建物は奈良時代に属するものである可能性がある。
- ③ 第25次調査では、金堂の規模は桁行が7間で柱間は11—11—12—12—12—11—11尺、梁間が4間で柱間は11—11.5—11.5（—11）尺であり、基壇の出は11尺であることを確認した。基壇は旧表土を浅く皿状に掘り込んだ上に一单元6～14cmの厚さで築土し、高さは3.5尺程度と推定できる。基壇化粧は凝灰岩切石によるとみられる。基壇上の構造物としては南側柱列の礎石が5個、身舎北側柱列中央部の礎石が3個原位置に残り、その上面の標高は129.85m前後である。この身舎北側の中央一間分の礎石の間に扁平な玉石が一行に並べられているのが確認された。これは本尊の背後にあたり、来迎壁の地覆石であると判断される。基壇上面と南側には多数の墓壙が造られており、下部のものは素焼き皿、上部のものは寛永通宝、煙管などを伴う。またその上部からは馬骨とともに「宝暦三年」（1753年）の墨書銘をもつ石製馬頭観音が出土している。
- ④ 第26次調査では、金堂の西方で土器・鉄器などを廃棄した11世紀中頃の土壙（S K 33）などが確認された。またこの付近では中世のものと思われる多数の小柱穴、土壙、井戸遺構が検出され、国分寺廃絶後に住居区域として利用された状況が認められた。

**遺物** 瓦を主に、コンテナバット300個分以上が出土した。金堂跡周辺からは五輪塔などの石造物が多数出土している。これ以外には、塑像片、金銅製飾金具、鉄製鉸具などがある。これらの成果は『史跡上野国分寺跡発掘調査概要5』にまとめて発表した。

## 7. 昭和60年度の調査

第27～29次調査を、塔跡南側の旧地形と整地状況、遺構の確認、寺域中央部の溝状掘り込みの状況の確認、金堂跡南側の遺構と中門跡の検出を目的として行った。

**遺構** 確認された主な遺構の概要は次の通りである。

① 第27次調査では、塔跡の南側50～60mで7世紀末から8世紀中葉にかけての竪穴式住居（S J 16・17・24）と、それを切って造られた南北に廂をもつ2×4間の掘立柱建物（S B 12）が検出された。S B 12は、(イ)柱穴は方形の比較的大きな掘形をもつ、(ロ)掘形の埋土中に瓦片・平安時代以降に属する土器片が混じっていない、(ハ)柱を抜きとった後粘質土で埋め戻している、(ニ)柱穴の重複は認められず1期のみ建物である、(ホ)8世紀中葉のS J 24は人為的に埋め戻されておりこれを切って柱穴が造られている、(ヘ)東側柱列は塔の西側柱列の延長線とほぼ揃う位置にある、(ト)東側に方位を同じくする目隠し塀状の柱列（S A 03）を伴う、などの点から、8世紀中頃に塔などの造営に関連して設けられた諸施設の中で、その中心となる建物であると推定された。また塔の南側約82mの位置で南辺築垣の一部を確認したが、本体は完全に削平され基部のみが残存していた。軽石混り黒褐色粘質土を盛土した基部の上面も削平されているが、これを切って竪穴式住居2軒（S J 21・22）が造られていた。この住居が11世紀初頭から前半のものであることから、南辺築垣は11世紀初頭には既に全壊の状態であったことが明らかとなった。これは「上野国交替実録帳」に、寛仁4年（1020年）には既に築垣や南大門などが無実（滅失）となっていたと記されているのに符合する状況であることに注目された。

② 南大門の南側の第28次調査では、寺域中央部にある溝状掘込み（S D 02）の南側延長部も、寺域内と同様に後世に設けられた溝であることが明らかとなった。階段状に掘られた中央部には流水の痕が認められ、旧寺域内の滞水を染谷川に排出するための溝であると推定された。国分寺に至る参道の跡などは確認できなかった。

③ 金堂南側の第29次調査では、昭和10年代の現地調査で確認されている中門跡と推定される礎石の確認を行った。しかし根石状遺構1ヶ所と、破碎された多量の石片を確認したのみで、礎石および中門の存在を示す遺構は検出されず、中門の正確な位置と規模、構造を明らかにすることは困難となった。金堂の南側は表土が薄く、耕作による攪乱が地山にまで及んでいるため遺構の残存状況は悪い。ここでは縄文時代中期の竪穴式住居1軒（J S 28）、奈良時代前期の竪穴式住居3軒（S J 25・26・27）が検出されたが、国分寺に直接関連する遺構は確認出来なかった。廃絶後の様相を窺わせるものとしては、墓壙が51基検出されたほか方形土壙などがあったが、これらの造られた時期を示す確実な資料は得られなかった。

**遺物** 竪穴式住居址からの土器・瓦片などコンテナバット80個分以上が出土した。また、第29次調査では墓壙内などから、五輪塔の部分などの石造物が90点以上出土している。文字瓦は52点出土しているが、「戒」は「武」を崩したもので、多胡郡武美郷を示すものであることが判明した。これらの成果は『史跡上野国分寺跡発掘調査概要6』にまとめて発表した。

## 8. 昭和61年度の調査

第30～32次調査を、塔跡南側の遺構の確認、寺域南外側西半部の旧地形と遺構の状況の確認、東大門推定地東半部の検出を目的として行った。

**遺構** 確認された主な遺構の概要は次の通りである。

① 第30次調査は、前年度の第27次調査の追加として、塔跡の南37～96mの範囲で実施した。全体に耕作による攪乱が目立つが、W50以西では地山の黄褐色粘質土がやや高く残っており、縄文時代中期の円形竪穴式住居1軒（S J 29）が検出された。周辺の造成用盛土とみられる軽石混り黒褐色粘質土中にも、同時期の土器片、石器片が含まれており、ここが古くから居住地とされていたことがわかる。その南側で一辺5m前後の竪穴式住居（S J 30）が検出されたが、第30次調査で掘立柱建物（S B 12）に切られた状態であった竪穴式住居（S J 16・24）と同時期のものであり、国分寺が建立される直前までであった集落の一部とみられる。その南東約20mで、竪穴式の鍛冶場跡（S K 85）が検出された。東西560cm・南北250cm（現状）であるが、北半部は円形土壇（S K 82）によって切られている。床面には円筒状に掘られた炉跡が2ヶ所確認され、銅の溶解に使用された埵塙と羽口が出土している。また炉跡近くから出土した須恵器坏の体部外面に「造仏」の墨書があり、9世紀後期にここに国分寺に係る工作場が設けられていたことに注目される。塔中心から南へ77mの位置で南辺築垣の基部が検出されたが、その南外にある溝（S D 01）は幅11.6mと広く、埋土中位に中世の生活面が形成されているのが確認された。国分寺廃絶後の遺構としては、方形土壇（S K 77）と竪穴式住居（S J 31）、墓跡多数が検出された。S K 77の底部からは南北朝期のもものとみられる鰐口1個が良好な状態で出土している。

② 寺域南外側西半部の第31次調査では、地山および自然堆積層が北西から南東に向って僅かに低くなっていること、遺構は南辺築垣から20～30mの範囲に集中してあることが確認された。ここでは6世紀前期の竪穴式住居2軒（S J 35・41）、7世紀前期の竪穴式住居（S J 45）、9世紀前期の竪穴式住居（S J 34）以外は、10～11世紀初頭の竪穴式住居（S J 37・43など）と土壇（S K 87など）などの多いことが目立つ。これらのあり方から南辺築垣の周辺は、古くから居住地とされていたのが国分寺の建立に伴い土地利用に規制が加えられたこと、それが10世紀代には弛緩していった状況を窺うことができる。

③ 第32次調査は、寺域東辺中央部で確認されている東大門推定地の東側（史跡地外）で行った。ここでは昭和45年の調査で礎石とみられる自然石1個の所在が確認されており、東大門の遺構の検出が期待された。しかし後世の溝と墓壇、それに耕作による攪乱が著しく、一部に盛土状の高まりのあること、鬼瓦片を含む瓦の散布がみられることなどから、東大門がこの近くにあった可能性を強めるにとどまった。

**遺物** 竪穴式住居出土の土器、瓦溜・土壇出土の瓦片などコンテナバット214個分が出土した。この中には、墨書土器2点、文字瓦76点、埵塙・羽口、鰐口、石造物などがある。

これらの成果は『史跡上野国分寺跡発掘調査概要7』にまとめて発表した。

## IV 調査の概要

### 1. 目的および調査方法

目的 昭和55～61年度の調査の成果にもとづき、整備のための具体的な資料を得るために次の諸点を目的として実施した。

- ① 寺域北東隅部の遺構の状況の確認。
- ② 寺域北西部の遺構と地形の確認。
- ③ 既出土資料の整理。

調査方法 基本的には昭和55～61年度と同じである。

- ① 昭和56年度まではトレンチによる調査を主とし、状況に応じてこれを拡張する方法をとり、第1～15トレンチを設定した。昭和57年度以降は発掘区域を面的にとるためトレンチの名称を廃し、「第〇次調査」と称している。
- ② トレンチ名称との混同を避けて第16次調査から始め、以後調査順に第32次調査まで実施した。
- ③ 調査基準線は国土調査法による第Ⅸ座標  $X = 43,750.0$ 、 $Y = -72,500.0$  を基準点として、座標北より  $4^\circ$  西偏させて設定した。ただし本書における方位は、国土座標によって表示している。
- ④ 各調査区域・遺構の座標値は、基準点を  $(0 \cdot 0)$  とし、それを中心にした東・西・南・北を E・W・S・N として、基準点からの方位と距離 (m) によって表示した。
- ⑤ 遺構の実測は遺形を組み実施した。
- ⑥ 遺構の配置などの検討にあたっては  $1/200$  および  $1/500$  地形図を使用した。
- ⑦ 遺構は次の分類記号によって表示し、種類ごとに一連番号を付した。

SA：柱穴列など SB：建物 SD：溝・濠 SE：井戸 SF：築垣・堀 SJ：竪穴式住居 SK：土塋 ST：墓墳 SX：性格不明

Table. 1 調査区の位置と目的

発掘面積 651.5 $m^2$

調査次	位置	目的	備考
33	寺域北東隅 N 64～119・E 117～120 N 80～83・E 100～120 N 79～85・E 120～123 N 110～113・E 90～125	国分寺遺構の確認 後世遺構の確認 旧地形の調査	調査面積 298.5 $m^2$ 昭和58年度第20次調査地の東方
34	寺域北西部 N 58～130・W 27～30 N 70～83・E 8～11 N 75～78・W 44～E 8	国分寺遺構の確認 後世遺構の状況の確認 旧地形の調査	調査面積 353 $m^2$ 昭和55年度第4トレンチの東側・昭和58年度第20次調査地の西側・昭和59年度第26次調査地の北側

(1) 昭和55～62年度の発掘調査面積は合計11,700.5 $m^2$ で、史跡地全体の18.9%となる。

(2) 出土遺物は土器、瓦片、石造物などコンテナバット約65個分がある。昭和55年度からの累計はコンテナバット約3,660個分となるほかに、石造物(部分)多数がある。

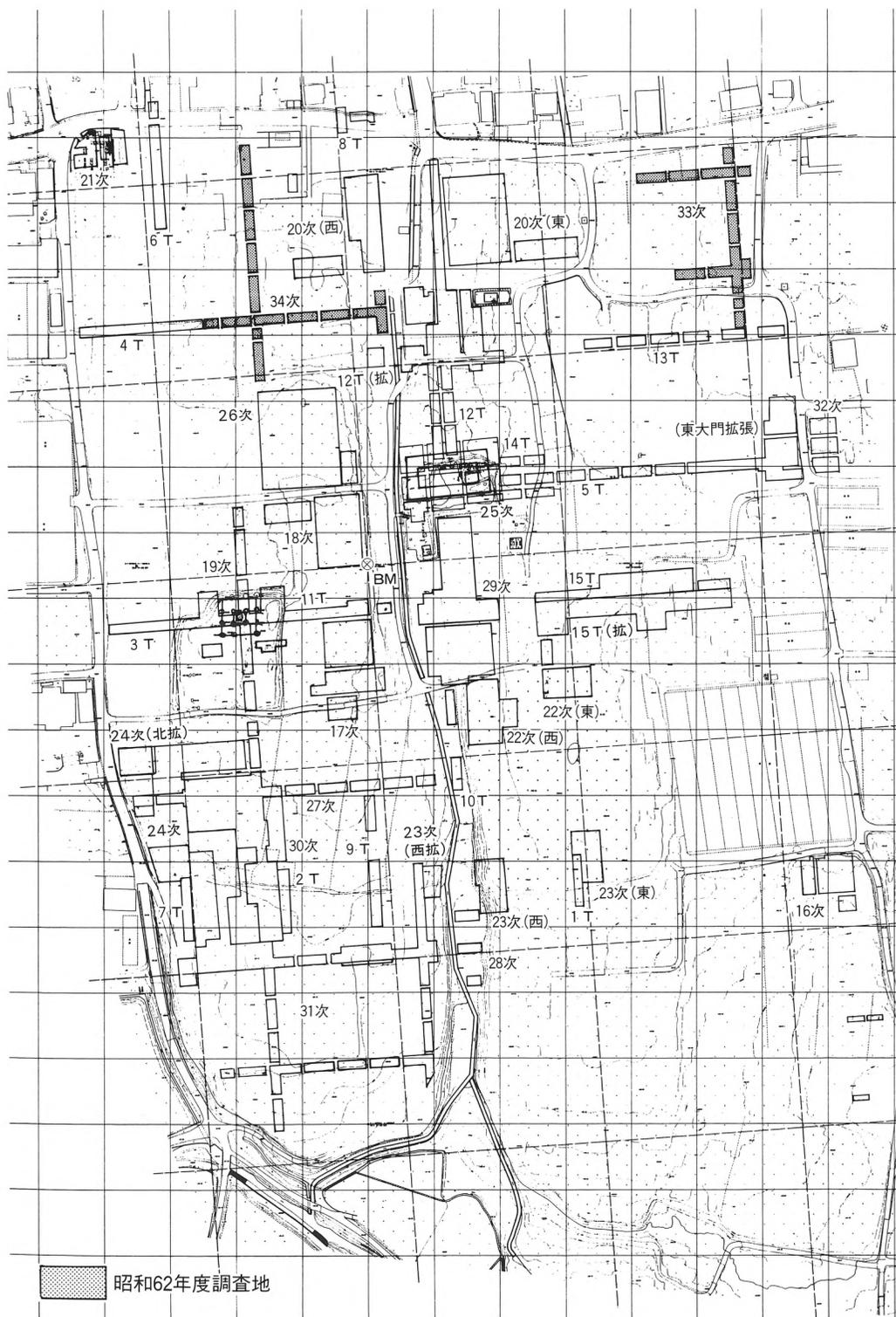


Fig. 4 遺跡全体図・トレンチおよび調査区位置図 1/2,000

## 2. 調査の経過

本年度の発掘調査は、昭和62年10月28日から昭和63年2月18日まで実施し、同2月19日からは出土遺物および各種資料の整理を行った。以下、その経過を月ごとに略記する。

- 4月 前年度調査資料の整理、諸事務処理などを行う。
- 5月 これまでの調査で出土した瓦類の拓本とり、台帳作成作業を行う。
- 6月 瓦拓本台帳作成、出土土器類の復元作業を行う。史跡整備基本設計を発注するための準備を進める。小学校の修学旅行・遠足による来跡が多い。
- 7月 これまでの調査で出土した土器などの復元作業を行う。遺物台帳の作成作業を開始する。史跡地内の除草、剪定、水路清掃作業を行う。整備基本設計を発注する。
- 8月 遺物台帳の作成を進める。整備基本設計の内容検討などを行う。
- 9月 遺物台帳作成、これに伴う遺物の追加実測などを行う。群馬町農政課より史跡地北側水路の制水門設置について協議がある。
- 10月 遺物台帳作成、追加実測を進める。調査準備を行い、28日より第33次調査に着手する。
- 11月 第33次調査区は、全体が灰色砂の地山面まで攪乱を受けた状態であることが明らかになる。地山面では小型で方形の柱穴が多数検出される。またN117・E119で円形土壙S K101、N112・E123で方形土壙S K102、N82・E120付近で径4m前後の大型の円形土壙S K103が確認される。25日より第34次調査を開始する。
- 12月 S K103の掘り下げを行う。埋土下部から多量の礫と皿が出土する。第33次調査の写真撮影、実測を行う。第34次調査でも、全体的に砂土の地山面まで攪乱が及んでいることが確認される。N75・W33で浅い溝S D09Cが検出される。またN76・E10で礎石状の自然石が1個横転した状態であるのが確認される。21日に整備委員会幹事会議を開催する。
- 1月 第34次調査のN107~130は、家屋の基礎工事などによる攪乱が著しい。地山面の小形柱穴の調査を進める。写真撮影をし、実測に着手する。16日に「文化財の集い」現地説明会を開催する。参加者は約120名。史跡地北側の水路改修工事の立合いをする。
- 2月 第34次調査の実測を進める。9日に整備委員会を開催する。18日に埋め戻しおよび整地作業を終了する。引き続き出土遺物の整理作業に入る。史跡地境界標設置に伴う調査を行う。
- 3月 出土遺物の接合・復元・実測、図面・写真類の整理を行う。史跡地境界標設置に伴う作業を行う。整備基本設計が完成する。

発掘調査に並行して、これまでの調査で出土した膨大な量の瓦の洗浄・分類作業（コンテナバット約450個分）と遺物台帳の作成などを進めた。これ以外に整備基本設計を文化財保存計画協会に委託して実施し、また史跡地境界標の設置を行った。史跡地の環境保全のために通年で除草・剪定作業・水路の清掃作業を行った。修学旅行、遠足、郷土研究会、研究者、文化財関係者など3,200名以上の来跡者があったが、説明資料・パンフレットの配布、また国分寺想像図を使っ  
ての説明、出土遺物の閲覧などにより、史跡に対する理解を深めることに努めた。

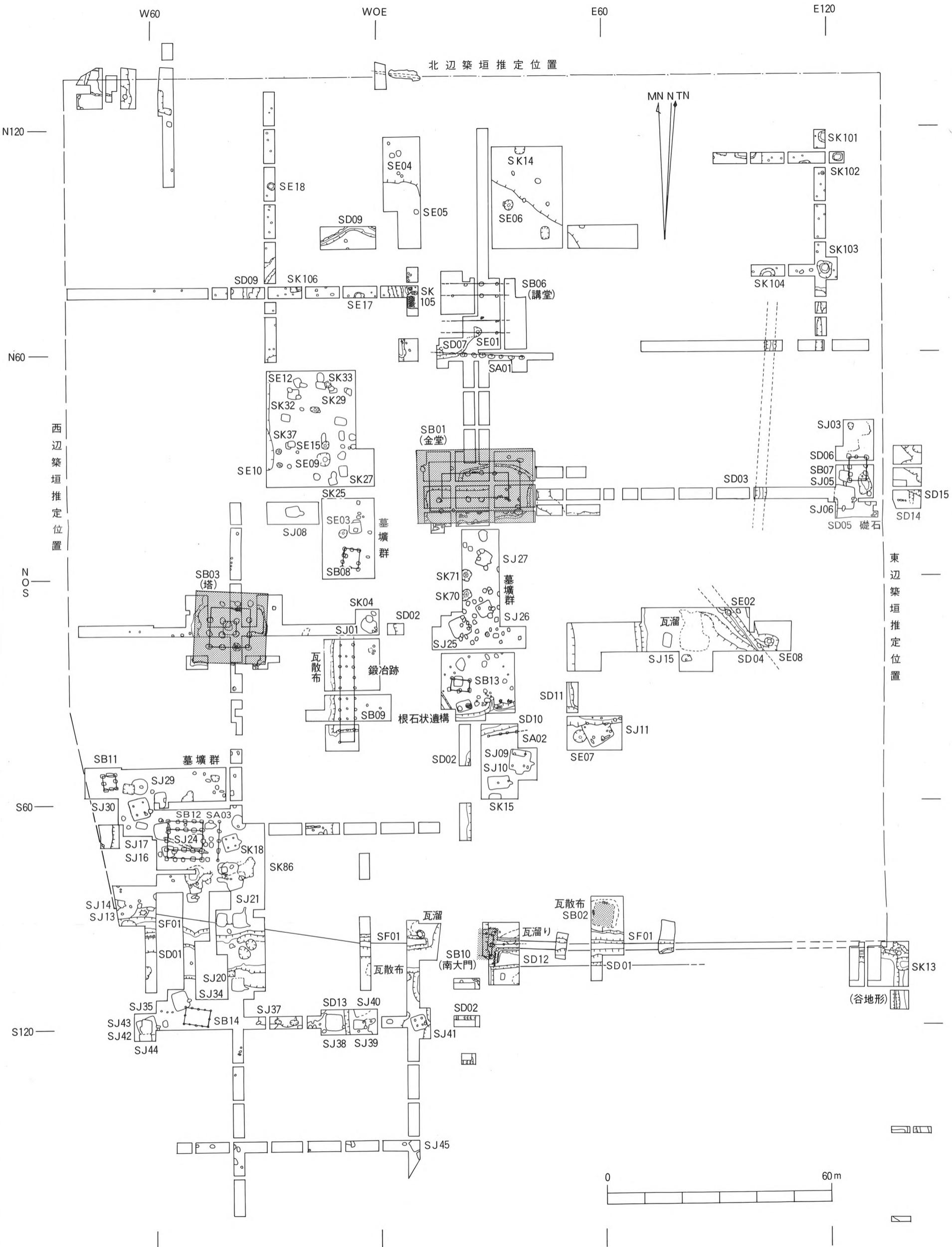


Fig. 5 史跡上野国分寺跡遺構全体図 1/1,000

### 3. 第33次調査

#### (1) 遺構

寺域北東隅周辺については、昭和56年度の第13トレンチで今次調査地の南側、昭和58年度の第20次で同じく西側の発掘調査を実施している。第13トレンチ調査は、N60～63の3m幅でE70～131のほぼ寺域東辺に近い位置で行った。全体に地山まで攪乱が及ぶ状態であったが、一辺が20～30cmの方形柱穴が散在して検出された。E104～106で、上部幅2.7m・底部幅0.9～1.1m・深さ1.2mで断面「U」型の南北方向の溝（SD03）が検出された。この溝は南側から直線状に続くもので、底部から室町時代のもつとみられる宝篋印塔の塔身が出土している。標高はN63・E130の黄褐色土地山面で128.70m、SD03底部の灰色砂土面で127.10mである。国分寺存続期の遺構は確認されず、また顕著な遺物の出土もなかった。第20次調査（東）は、N88～115・E31～70の範囲で行った。調査区全体で、灰色砂土の地土面まで攪乱が及んでおり、地山面上には部分的にはあるが、北西から南東に向う流水の痕跡とこれによる砂礫の堆積があるのが認められた。地山面には中世の円形井戸遺構（SE06）と方形土壙（SK14）、一辺20～40cmの方形柱穴などが多数あるが、この多くは流水による堆積層の下から検出されている。国分寺存続期の遺構は確認されず、顕著な遺物の出土もなかった。標高はN100・E12の淡黄褐色砂地山面で127.95cmである。この付近には、国分寺の施設として僧房・政所・大衆院・倉などがあったことが想定できるが、これらの遺構の残存は認められなかった。ただ中世の土壙・建物・井戸遺構などが多数あることから、国分寺廃絶後は居住地として使われていたものとみられる。

第33次調査地は寺域の北東隅にあたり、北側は幅約5mの町道、東側は幅3mの小道に接し、もとは畑地であった。現地表面の標高は127.90～128.20mで、西から東に向かって僅かに低くなる。また調査地の南側に接する農道から南は一段高い地形となっており、現地表面の標高は128.70m前後である。この東西約40m、南北約50mの調査区に、「キ」型で幅3mのトレンチを設けて実施した。調査の結果、堆積土層は暗褐色土の現耕作土が厚さ約30cmで均一にあり、その下は直ちに黄灰色砂土の地山となる部分と、地山の砂土が混じる厚さ約40cmの攪乱層のある部分とがあるのが確認された。地山の砂土は川砂状で固くしまっており、局部的に小豆大の礫を多量に含む。また色調は灰色であるが、表面は鉄分の影響で黄色味を帯びている。この地山面で多数の小柱穴と土壙が検出された。地山面の標高は、調査地北西部のN113・E100で127.30m、北東部のN119・E120で127.20m、南西部のN83・E100で127.65m、南部の農道南側の黄褐色砂質土面で128.50mである。この状況から、N75以北では地山が100cm前後削平ないし攪乱をうけたものとみられた。

小柱穴は調査地のほぼ全域で検出され、一辺15～25cmの方形のものが多く、検出面からの深さは5～70cmとばらつきがある。これらは3～4個の並びはとらえることができるが、1棟の建物にまとまる組み合わせを確認することは困難であった。分布の状態をみると、N80～83・E100～123、N100～113・E104～125に多く、また重複しているものもあることから、少しずつ場所を移して数回の建て替えが行われていたものとみられる。

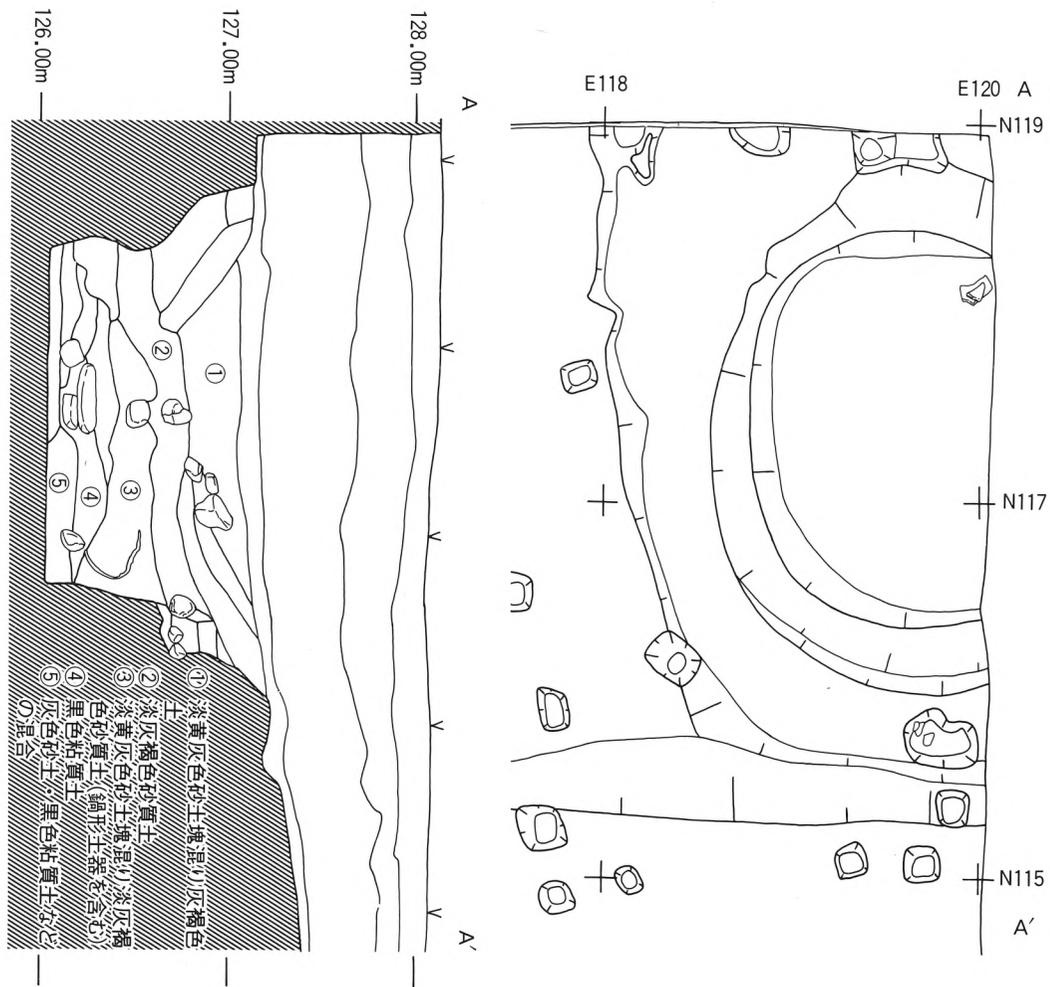


Fig. 6 SK101 1/40

SK101 調査地の北端、N117・E120を中心とする位置で素掘りの土壌が検出された。東側約1/2は調査地外となる。上面は南北270cm、東西140cm（以上）の楕円形で、検出面からの深さは約120cmである。掘形は上半部はラッパ状に開き気味となるが、下半部は垂直に近い急角度であり、底部は平坦である。底部には自然堆積とみられる、木炭小片を含む灰色砂土・暗灰褐色などの混合土が厚さ約15cmである。その上に径30cm程の扁平玉石を含む黒色粘質土があり、さらに砂土塊を含む褐色土がのる。堆積状態は掘り上げた土を使った人為的な埋め戻しであることを示しており、断面の観察により南側から土砂の投入が行われたことがわかる。埋土下部に内耳鍋形土器のほぼ完形品が1個入っており、これが15世紀中期頃のものと思われることから、この頃に埋め戻されたと推定される。用途、性格については不明である。

SK102 調査地の東端、N112・E123を中心とする位置で素掘りの土壌が検出された。上面は東西230cm・南北200cmの隅丸長方形で、検出面からの深さは約85cmである。掘形は70°前後の急角度であるが、地山の灰色細砂層にあたる部分で壁面の崩落による挟れが生じている。底部は平



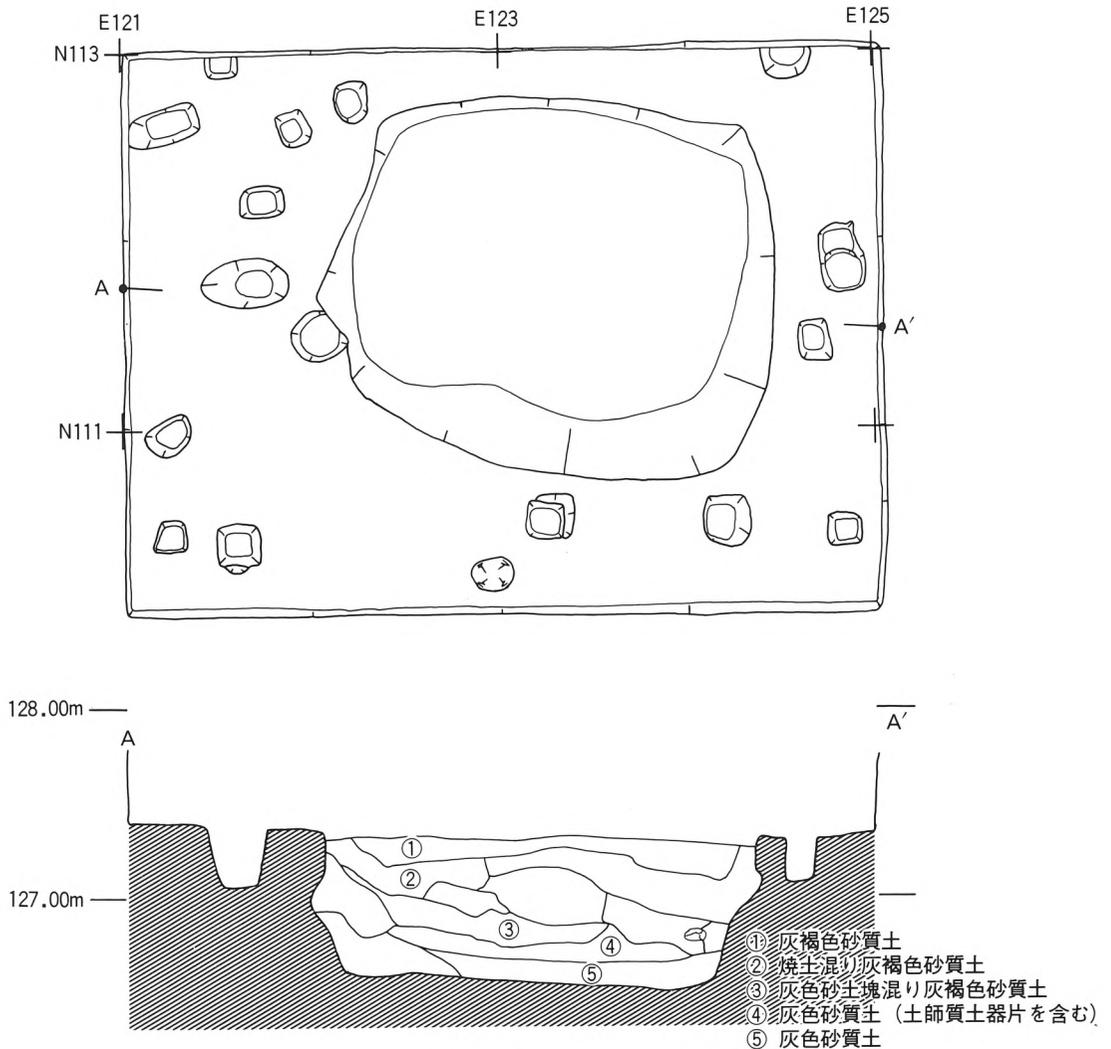


Fig. 8 S K 102 1/40

坦に整えたようになっている。方位はW-10°30'-Nを示す。埋土は地山の砂土塊を含む灰褐色砂質土を主体とし、上半部には焼土小粒と木炭小粒が少量混じっている。断面の観察では、短時間の内に南西方向から埋め戻された状況が認められる。底部には遺物がみられず、埋土中にも素焼きの土器小片1点が混じっていたのみである。周辺には小柱穴が多数あるが、これに伴う顕著な遺構は確認できない。形状、埋土からS K 101と同様のものとみられるが、時期と用途を確定する資料は得られなかった。

S K 103 N 82・E 119を中心とする位置で、大規模な円形土壌が検出された。上面は東西400×南北420cmの円形、底部は東西100×南北150cmの楕円形をなし、検出面からの深さは約250cmである。掘形は上半部は垂直に近く、下半部は65°前後の急傾斜である。この変化点の南側と北側に、

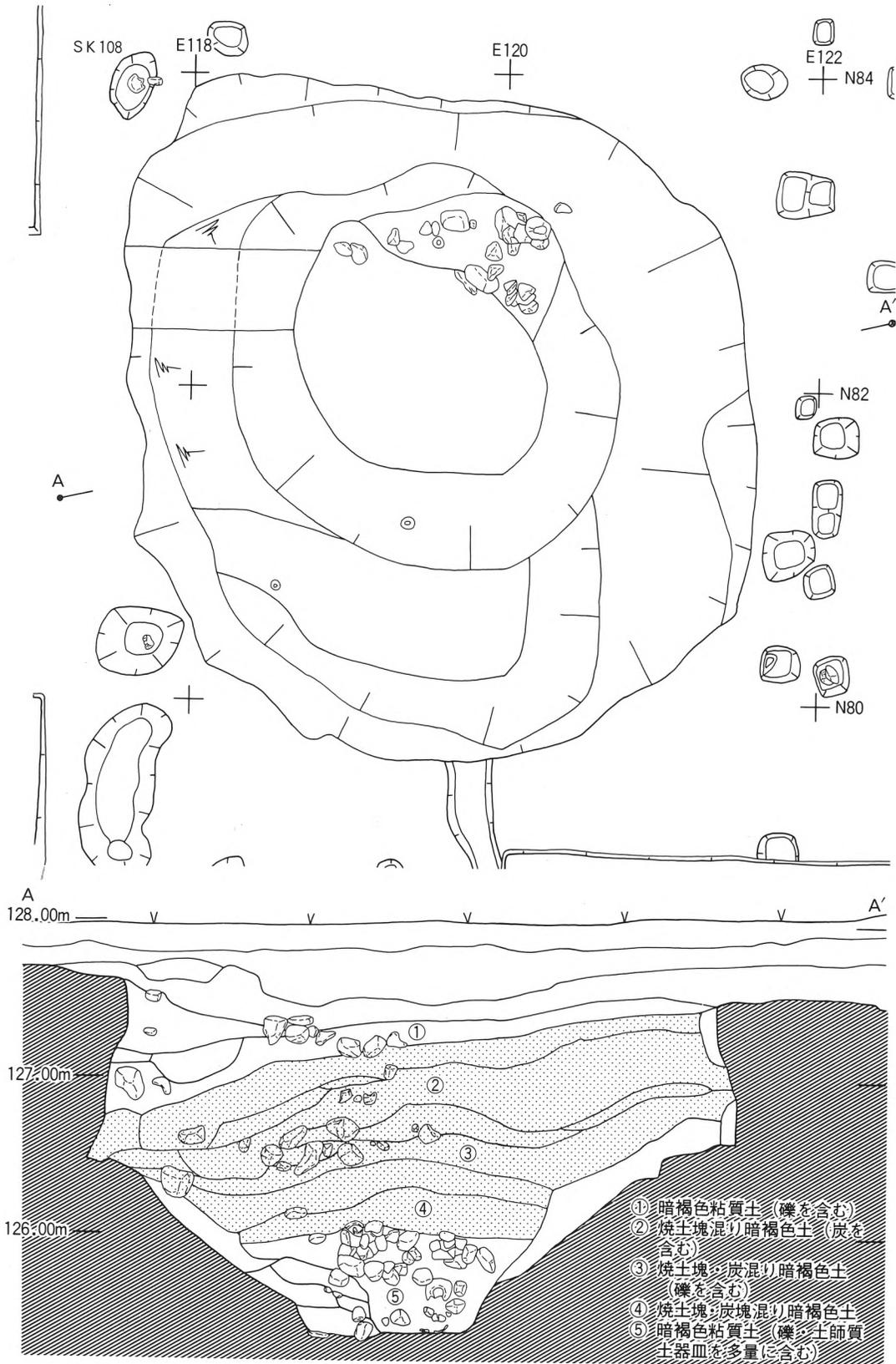


Fig. 9 S K 103 1/40

足場状の狭い平坦部が造られている。底部の北半部には、径5～20cmの礫が厚さ約70cmで投げ込まれた状態で堆積しており、凹石、基壇の化粧石とみられる角閃石安山岩切石、内耳鍋形土器片などが混じていたが、特に夥しい量の土師質土器皿とその破片が含まれていることに注目された。埋土の状態をみると、礫と皿の投入後に崩落した地山の砂土と表土の暗褐色土の混合土が底部から厚さ60cmで堆積しており、その上部には厚さ約130cmの焼土混り層がある。この焼土混り層は米粒～ピンポン球大の焼土塊、黒色灰および暗褐色土が混じり合ったもので、それぞれの含有量により11層に細分できる。この中には木片および竹が焼けたものが含まれており、また5～20cm大の礫が点在している。堆積状況からみて、一時に投入されたものと判断される。その上には、暗褐色土と黄灰色砂土塊が堆積しており、この中にも小礫が含まれていた。こうした埋土の状況から、①土壌が掘られる→②北側から礫・土師質土器皿が投入される→③南側から地山の崩落などによる自然堆積層が形成される→④若干の時間を経過した後に焼土混り土が投入される→⑤引き続いて暗褐色土などによる埋め戻しが行われる、との過程が想定できる。このS K 103は、これまでに寺域北半部で検出された土壌の中で最大規模のものである。皿には完形品も多いが、灯明皿として使用された痕跡は認められない。礫などと混在してあることから、何らかの行事に使用されたものが一括して廃棄された状態とみられる。焼土は、この近くで木片、竹などを焼く行為が行われ、その残りが投入されたものであろう。土師質土器皿はその形状から14世紀末から15世紀中期のものであり、投棄されたのもその頃と判断される。土壌はこれより以前に造られていたとみられ、皿の投棄に関連して掘られたものとは見なし難い。周辺にこれに係る遺構は確認できず、本来の用途は不明である。

これらの遺構以外に、N 86・E 117で径30×40cm・深さ30cmの小土壌（S K 108）が検出され、その底部に土師質土器皿が4個伏せた状態で重ねられたようにしてあった。これらはS K 103出土のものと同形であるが、この内の2個には内面に「一」・「由尔」とみられる墨書があった。この種の皿が祭儀埋納用に使われた可能性を示している。S K 103の西側1.5mで、径90cmの円形墓壇が検出された。遺骨はほとんど残っていないが、15世紀末頃のものともみられる土師質土器皿が出土している。S K 103の埋土を掘り込んだ状態で墓壇が造られていたことも確認されており、15世紀末頃にはこの周辺にも墓が造られるようになった状況が窺える。N 80・E 104で検出された浅い円形土壌（S K 104）の底部には、5～20cm大の礫と瓦小片が多量にあったが、これらは埋め戻しの際に入れられたものとみられる。時期と用途は不明である。第13トレンチで検出されたS D 03の北への延長部は確認されず、N 80までは延びていないと判断された。

寺域北東隅は、全体に地山まで攪乱が及んでいるため、直接国分寺に係る遺構は残存していなかった。また地山の砂土が著しく削平されたことがあったようであるが、流水の痕跡などは確認できなかった。国分寺の廃絶後は、小規模な掘立柱建物が多数造られるような居住地となっていたが、その時期は14世紀後期から15世紀後期にかけてと推定される。

(2) 遺物

第33次調査では、土器・瓦片・石製品などが、整理収納用コンテナバット45個分出土した。表土層中および検出面である地山面上からは、少量の土器片と瓦片が出土したのみで、大部分は土壌内からの出土である。このうち特筆されるものとして、円形大土壺であるS K 103から出土した多数の土師質土器皿がある。これらは土壌底部近くに堆積した多量の礫の中に混じっていたもので、約300個分があり、このうち約60個がほぼ完形で、残りは破片の状態出土した。これらの中の完形品および復元可能なもの147個の法量を計測し、その分布状況を示したのがTable. 2である。これによると、①口径113mm・器高30mmを中心とした中型群、口径72mm・器高18mmを中心とした小型群の2つの群に大別できる、②中型：小型=44：103の比率となる、③各群はさらに2～3群に細区分できる、④例外的に大型のものが1個ある、といった傾向を読みとることができる。成形技法は、左回転ロクロ成形後糸切りしたもので、底部は未調整である点で共通している。③は工人の違い、ないしは製作の時間的な前後関係によるものとみられる。器面に黒斑を伴うものがあるが、油煙が付着したものはみられず、灯明皿として使用された痕跡は認められない。この器形の皿は、これまでの調査では墓墳の埋土中に5個前後がまとまった状態に入っている例が多く確認されている。実用性のある食器とは考えにくい小型のものが多いことを考慮すると、墓葬などの祭儀あるいは供献用具であった可能性が強い。S K 103の出土状態からは、集団の祭儀に使用されたものが一括して土壌中に投棄された状況を窺うことができる。皿が出土した層のやや上から、同質の胎土を用い、同様な技法で作られた小型の花瓶とみられる土製品 (Fig. 10—⑮) が出土しており、これも祭儀用具の1種と考えられる。これらの皿は、関越自動車道路線敷の国分僧寺・尼寺中間地域の発掘調査の報告 (巻末の参考文献を参照) と照合すると、14世紀末期～15世紀前半期のものとみることができる。S K 103の埋土中からは、これ以外に陶製と石製の播鉢・鍋・壺・碗などの土器片、中世瓦片、凹石、それに国分寺の基壇化粧に使われたとみられる切り込みをもつ板状の角閃石安山岩 (P L. 14—3)、軒平瓦片などが出土している。

Table. 2 S K 103出土 土師質土器皿法量分布

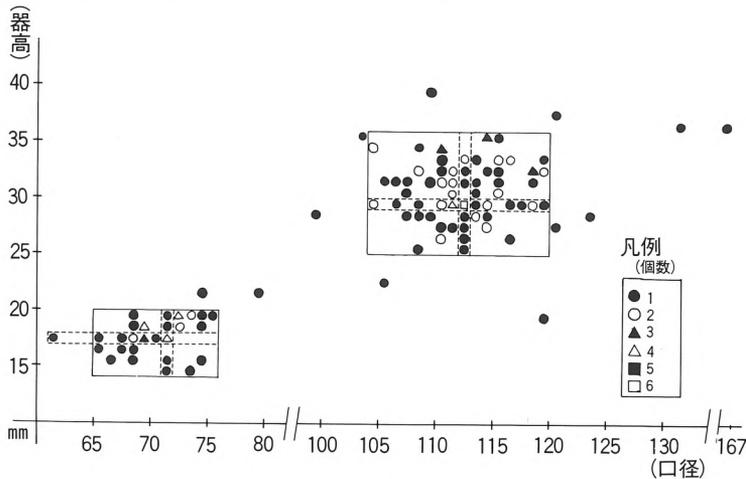


Table. 3 S K 103出土遺物観察表 (Fig. 10, 11)

番号	出土位置	種類	法 量 (mm)			胎 土		焼 成	色 調	成形・調整・その他	図版番号
			口 径	底部径	高 さ	素 地	挟 雑 物				
Fig10 ①	埋 土層	土師質土器皿	102	64	28	粗	砂粒を含む	軟	質 黄灰色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り未調整。体部を一部欠失。底部外面に「十」の墨書あり。	PL 13-1
②	焼土下層	土師質土器皿	116	60	29	粗	砂粒を含む	軟	質 黄灰色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り未調整。完形。	
③	埋 土層	土師質土器皿	115	68	30	粗	砂粒を含む	軟	質 赤褐色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り未調整。完形。	
④	埋土下層 SW区	土師質土器皿	111	62	35	粗	砂粒を含む	軟	質 黄灰色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り未調整。ほぼ完形。	
⑤	埋土下層	土師質土器皿	106	58	29	粗	砂粒を含む	軟	質 黄灰色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り未調整。口辺を一部欠失。	
⑥	埋土下層 SW区	土師質土器皿	107	70	30	粗	砂粒を含む	軟	質 黄灰色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り未調整。ほぼ完形。	
⑦	埋土下層 SW区	土師質土器皿	114	62	30	粗	砂粒を含む	軟	質 黄灰色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り未調整。口辺を僅かに欠失。	
⑧	埋土下層	土師質土器皿	110	62	33	粗	砂粒を含む	軟	質 黄灰色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り未調整。口辺を僅かに欠失。	
⑨	埋土下層 SW区	土師質土器小	77	54	18	粗	砂粒を含む	軟	質 黄灰色、底部外面黒灰色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り未調整。完形。	
⑩	埋土下層 SW区	土師質土器小	73	51	17	粗	砂粒を含む	軟	質 黄灰色、底部内外面黒灰色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り未調整。完形。	
⑪	埋土下層 SW区	土師質土器小	72	40	13	粗	砂粒を含む	軟	質 黄灰色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り未調整。完形。	13-4
⑫	埋土下層 SW区	土師質土器小	73	48	14	粗	砂粒を含む	軟	質 灰褐色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り未調整。ほぼ完形。	
⑬	埋土下層	土師質土器小	75	51	15	粗	砂粒を含む	軟	質 灰褐色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り未調整。ほぼ完形。	
⑭	埋土下層 NW区	土師質土器小	62	42	18	粗	砂粒を含む	軟	質 黄灰色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り未調整。口辺を欠失。	
⑮	埋 土層	土製品 (花瓶)	最大径 5.5	最小径 3.5	現存高 4.3	粗	砂粒を含む	やや軟質	質 灰褐色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り未調整。下位より三層目以上を欠失。	
⑯	埋 土層	石製挿鉢	310	150	128					半球状の石材を調整して鉢状につくる。体部内面下半に柔線が3本程度を単位にあり、使用痕も明瞭。注口1ヶ所。3片に折損するのを接合しほぼ完形。	PL 14-1
⑰	埋土下層 NW区	軟質陶器 挿鉢	28.4	107	114	粗	砂粒、石英等を含む	やや軟質	質 灰褐色	輪積成形後、底部静止糸切り未調整。注口1ヶ所。口辺を一部欠く。破損後2次焼成を受けた痕跡あり。	14-2
Fig11 ①	埋土下層 SW区	丸瓦 (中世瓦)	最大長 212	最大幅 142	厚 25	粗	砂粒を含む	やや軟質	質 外面黄灰色 断面 灰褐色	凹面に粘土板剥ぎ取り痕あり。側面の面取り2。%程度残存。	
②	埋 土層	白磁埴	(94)	(50)	(29)	密	殆ど含まない	硬	質 白色で、透明釉薬がかかる	ロクロ成形後、底部削り出し高台。その後高台部を更に削り込んで四脚状につくる。小破片。	
③	埋土上層 SW区	円筒状 土製品	(96)	(100)	(36)	粗	砂粒を含む	やや硬質	質 赤褐色	ロクロ成形後、底部糸切りか。小破片。	
④	埋 土層	耳 壺	(124)	124	(174)	粗	石英、褐色鉱物等を多量に含む	硬	質 全体に暗褐色を呈し、外面は自然釉が発色	輪積成形後、体部外面下半をへら削り。頸部付近に波状文を刻す。口辺は折り返しで、耳を付す(個数は不明)。下半部を中心として数片が接合。	
⑤	埋土下層 NE区	軒平瓦				やや粗	白色、灰色鉱物等を含む	硬	質 赤褐色	桶差作りの平瓦端部に粘土紐を付加して瓦当部をつくる。粘土板剥ぎ取り痕あり。凸面ユビナデ、側端はへら削りによる面取り2。	
⑥	埋土中層 NW区	軒平瓦				やや密	白色、灰色鉱物を多く含む	軟	質 外面灰白色 断面褐色	平瓦端部を瓦当范においた粘土紐に挿入してつくる。赤色顔料の付着あり。瓦当部小破片。	
⑦	埋土下層 SW区	軒平瓦				やや粗	白色、灰色鉱物を多く含む	硬	質 灰白色	瓦当部小破片。2次焼成を受ける。凸面に格子叩きを有し、全体に丁寧なつくり。	
⑧	埋土下層 SW区	軒平瓦				やや粗	白色、灰色鉱物を多く含む	硬	質 灰白色	側端面取り1、瓦当部小破片。	

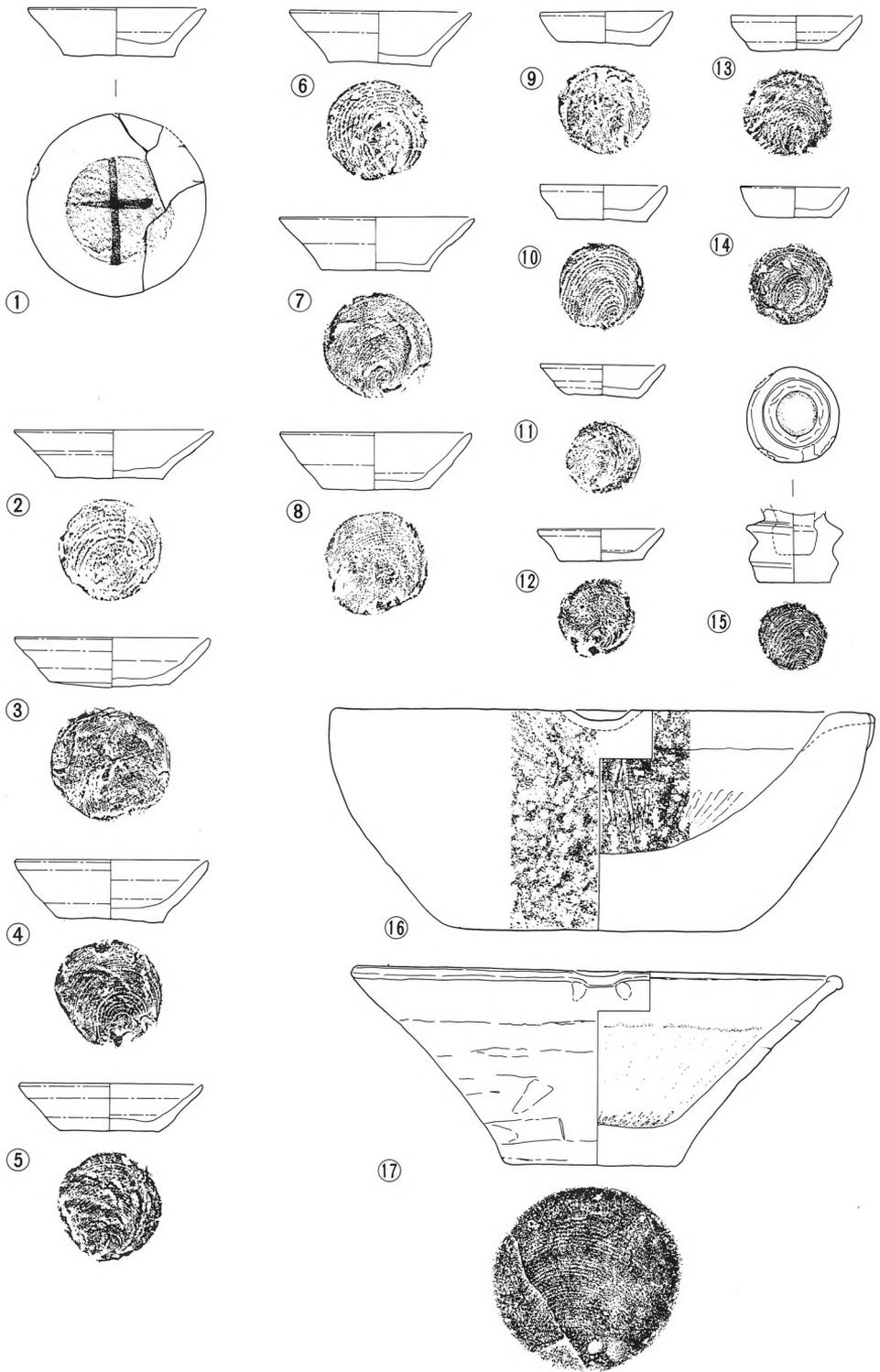


Fig. 10 S K 103出土遺物 1 縮尺1/4

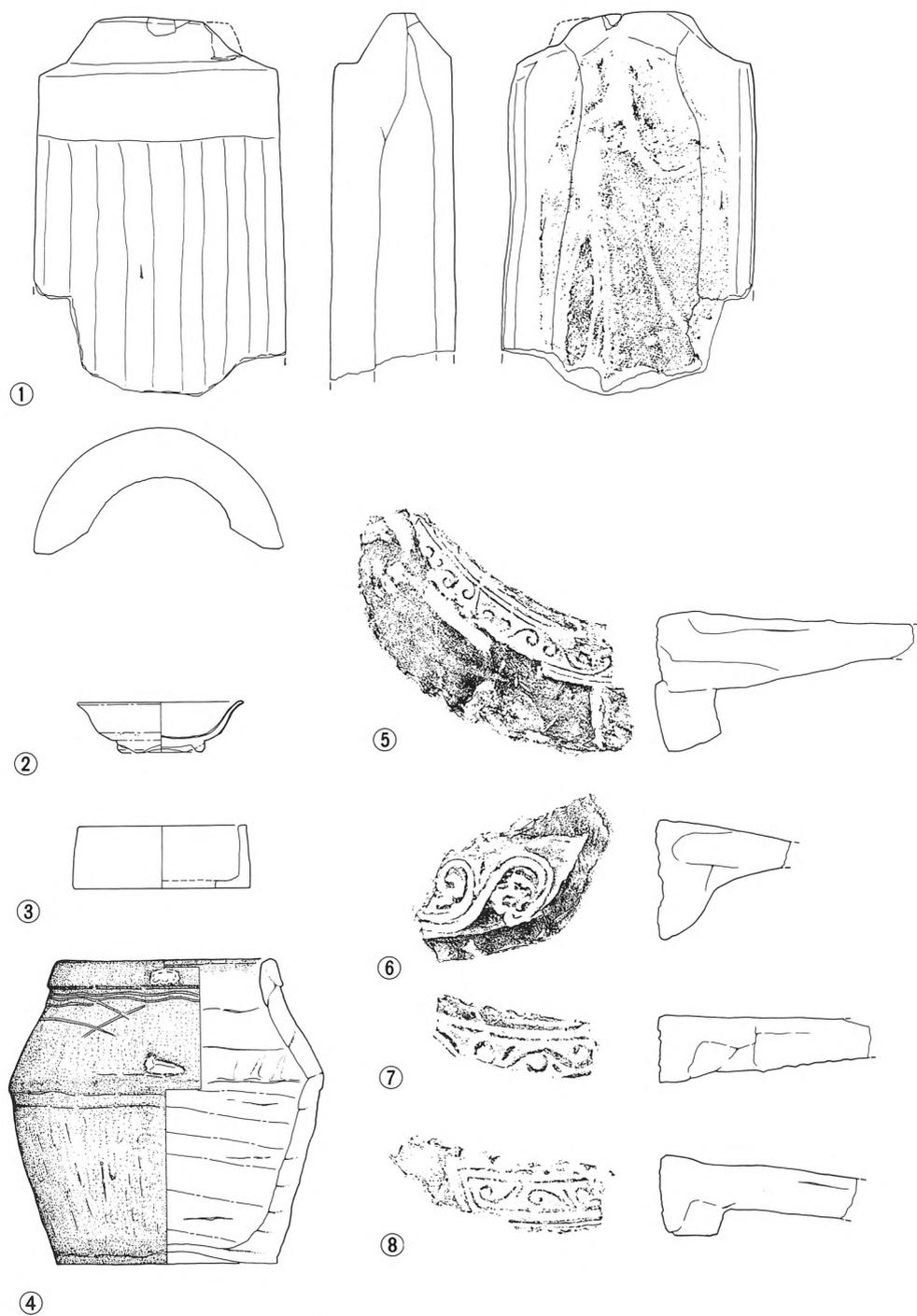


Fig. 11 S K 103出土遺物 2 縮尺1/4

また埋土中層の焼土混り層からは、木炭・竹の炭化物に混じって、これらの焼き上げに使われたとみられる表面に円形の焼痕がついた角柱状の角閃石安山岩切石が出土している。

S K 103の北西にある小円形土壙（S K 108）の埋土中から、土師質土器皿が4個伏せて重ねた状態で出土した。中型が2個、小型が2個あり、いずれも器形、成形技法ともにS K 103出土のものと同通している。中型のものの体部内面には墨書があり、1つは2文字を横書きしており「由尔」と読み、もう1つは「一」である。墨書の意味は不詳であるが、出土状態はこの種の皿が祭儀用に使われたことを示しており、S K 103から出土したものの用途を知る上で参考となる。

S K 101の埋土下部の砂土塊混り淡灰褐色砂質土中から、内耳鍋形土器1個が出土した。耳は2個で、口縁部は緩く外反し、平底である。体部外面には煤が付着している。これまでの調査で寺域内の土壙・井戸遺構などから内耳鍋形土器が出土しているが、これらは口径が26~27cmの小型、30~32cmの中型、35~37cmの大型のものに大別でき、本品は大型に属する。国分僧寺・尼寺中間地域での編年に従うと15世紀中期のものであり、S K 103出土の皿とはほぼ同時期である。

Table. 4 小円形土壙（S K 108）出土遺物観察表（Fig. 12）

番号	出土位置	種類	法 量 (mm)			胎 土		焼 成 色 調	成形・調整・その他	図版番号
			口 径	底部径	高 さ	素 地	挟 雑 物			
①	埋 土	土師質土器 皿	109	63	33	粗	砂粒を含む	軟 質 黄褐色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り、未調整。ほぼ完形。体部内面に「由尔」とみられる墨書あり。	P.L. 15-1
②	埋 土	土師質土器 皿	110	65	30	粗	砂粒を含む	軟 質 赤褐色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り、未調整。完形。体部内面に「一」の墨書あり。	
③	埋 土	土師質土器 小 皿	86	50	22	粗	砂粒を含む	軟 質 黄褐色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り、未調整。完形。	
④	埋 土	土師質土器 小 皿	79	58	20	粗	砂粒を含む	軟 質 黄褐色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り、未調整。完形。	

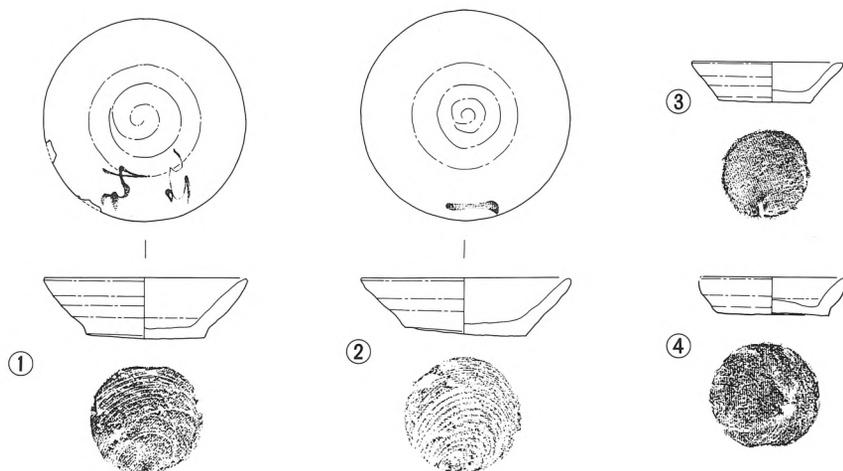


Fig. 12 小円形土壙（S K 108）出土遺物 縮尺1/4

S K 103の西側で検出された円形墓壇の埋土中からも、土師質土器皿が3個出土している。いずれもS K 103出土のものに較べて底径が大きく、体部は底部近くで強く押さえがされて直立状となり、そこから口縁部にかけては直線状に外反する形状である。S K 103出土のものに後出する、15世紀末期のものと思われる。

これら以外では、S K 104の埋土中から多数の礫とともに瓦小片が投棄された状態で出土したのが目立つ程度であり、国分寺に直接関係する顕著な遺物の出土はなかった。

Table 5 第33次調査区出土遺物 (Fig. 13)

番号	出土位置	種類	法 量 (mm)			胎 土		焼 成	色 調	成形・調整・その他	図版番号
			口 径	底部径	高 さ	素 地	挟 雑 物				
①	S K 101	内耳鍋形土器	360	287	182	粗	砂粒を含む	軟 質	外面黒色 断面黄褐色	輪積成形後全体にヨコナデ。底部及び体部外面下部に横位のヨコケズリ。底部 $\frac{1}{2}$ と口辺の一部を欠く。体部外面は火を受け煤の付着が目立つ。	P.L. 15-3
②	N81・E116墓壇	土師質土器皿	128	82	30	粗	砂粒を含む	軟 質	灰褐色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り未調整。一部欠失。	15-2
③	N81・E116墓壇	土師質土器皿	105	72	26	粗	砂粒を含む	軟 質	灰褐色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り未調整。一部欠失。	
④	S K 103焼土上面墓壇	土師質土器小皿	74	47	14	粗	砂粒を含む	軟 質	黄灰色	左回転ロクロ成形後、底部糸切り未調整。口辺及び底部を一部欠失。	

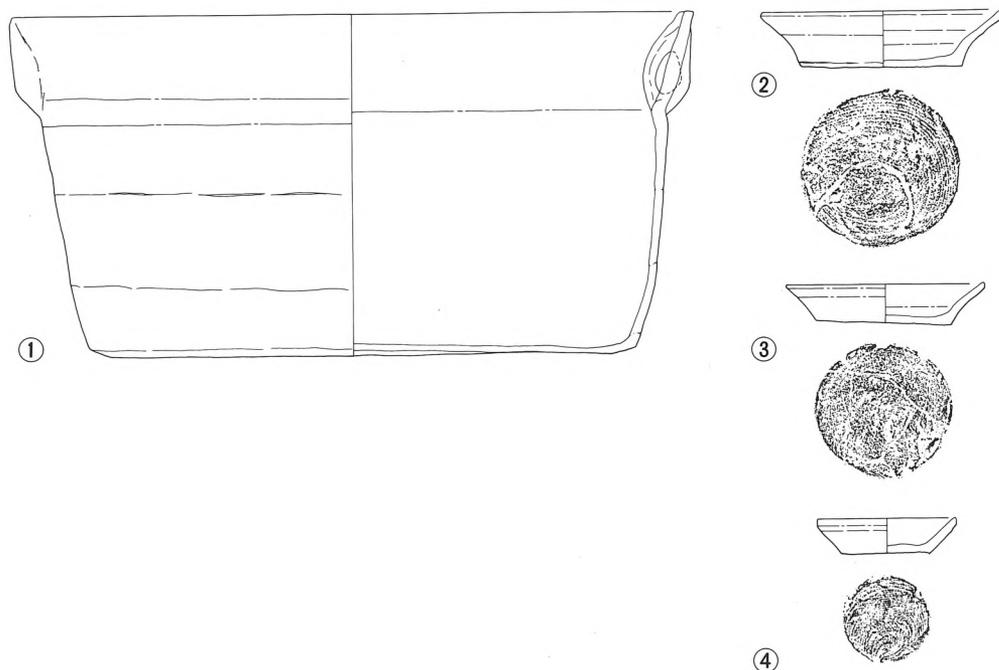


Fig. 13 第33次調査区出土遺物 縮尺1/4 ①S K 101 ②~④墓壇

#### 4. 第34次調査

##### (1) 遺構

寺域北西部については、これまでに昭和55年度の第4・6トレンチ調査、昭和58年度の第20次(西)・第21次調査を実施している。第4・6トレンチ調査は、寺域の西端と北端にかかる位置に幅3mのトレンチを設定して行ったが、耕作による攪乱と家屋の基礎地形による掘り込みが砂土の地山まで及んでおり、国分寺存続期の遺構を確認することはできなかった。地山の標高は、N78・W75で128.45m、N78・W51で128.15m、N120・W57で128.65mである。第20次(西)調査は、寺域北縁中央部で僧房などの確認を目的として行ったが、ここも砂土の地山まで攪乱が及んでおり、国分寺存続期の遺構としてはN113・E6で平安時代の井戸(S E04)1基を検出したのみである。地山面には一辺20cm~40cmの方形柱穴が多数と井戸遺構、土壌などが検出されたが、これらはいずれも中世に属するものである。またN89~94・W0~15の範囲で、南東から北西に向いN95・W6付近で鈍角に曲って南西に向う「へ」型に屈曲する溝(S D09)が検出された。上部幅は100~200cm・底部幅は50~120cm・深さ20~50cmで、底部近くには5~30cm大の礫、瓦小片、鍋形土器片が入っていた。地山の標高は、N115・E7で127.80m、N90・E7で127.90m、N90・W13で127.40m、S D09の底部で127.00mである。第21次調査は寺域北西隅の整備事業に伴う移転墓地跡で行ったが、ここは金堂中心から北へ1町(約109m)の位置にあたり、周辺に較べて一段高い地形となっている。調査の結果、表土の下は直ちに灰色砂土の地山となり、N128から南とW67から東ではこの地山が40~80cm削平されていることが明らかとなった。また、N130~136では地山が僅かに高くなっているが、この北側では急傾斜で下がっていることが確認され、この位置に北辺築垣のあったことが想定された。地山の標高は、N131・W75で129.44m、N136・W75で129.17mである。

第34次調査は寺域の北西部の東西55m・南北72mの範囲で、「+」型に幅3mのトレンチを設定して実施し、一部で拡張を行った。西は第4トレンチ、南は第26次調査地に接し、東は寺域中央部を南北に貫流する水路、北は町道に近接する。調査区全域で、耕作と家屋の基礎地形などのために、黄灰色砂土の地山まで攪乱が及んでいる状況が確認された。表土は厚さ40~75cmで3層に大別され、上部の2層は耕作土、下部の1層は地山の砂土およびその小塊を含む攪乱層である。地表面の標高は128.05~128.60mで、N68~95・E11~35の範囲で東に向かって開く「U」型状に低い部分がある。地山は固くしまっており、部分的に大豆大~径50cm以上の礫を含んでいる。標高は調査区南端のN58・W30で127.75m、中央部のN90・W30で127.50m、北端のN127・W30で128.20m、西端のN78・W44で128.15m、東端のN78・E11で127.45mである。地表面と同様に東に向かって緩く下がる形状を示している。その地山面で一辺20~30cmの方形柱穴が多数、径40~50cmの楕円形の柱穴状の穴が数個、それに土壌・溝・井戸遺構などが検出された。

S D09 N75~78・W31~35で、地山を浅い皿状に掘り込んで造られた南北溝(S D09c)が検出された。上部幅370cm・底部幅100~200cm・深さ約35cm(東岸から)で僅かに北が低くなって

Fig. 14 第34次調査区全体図 1/200



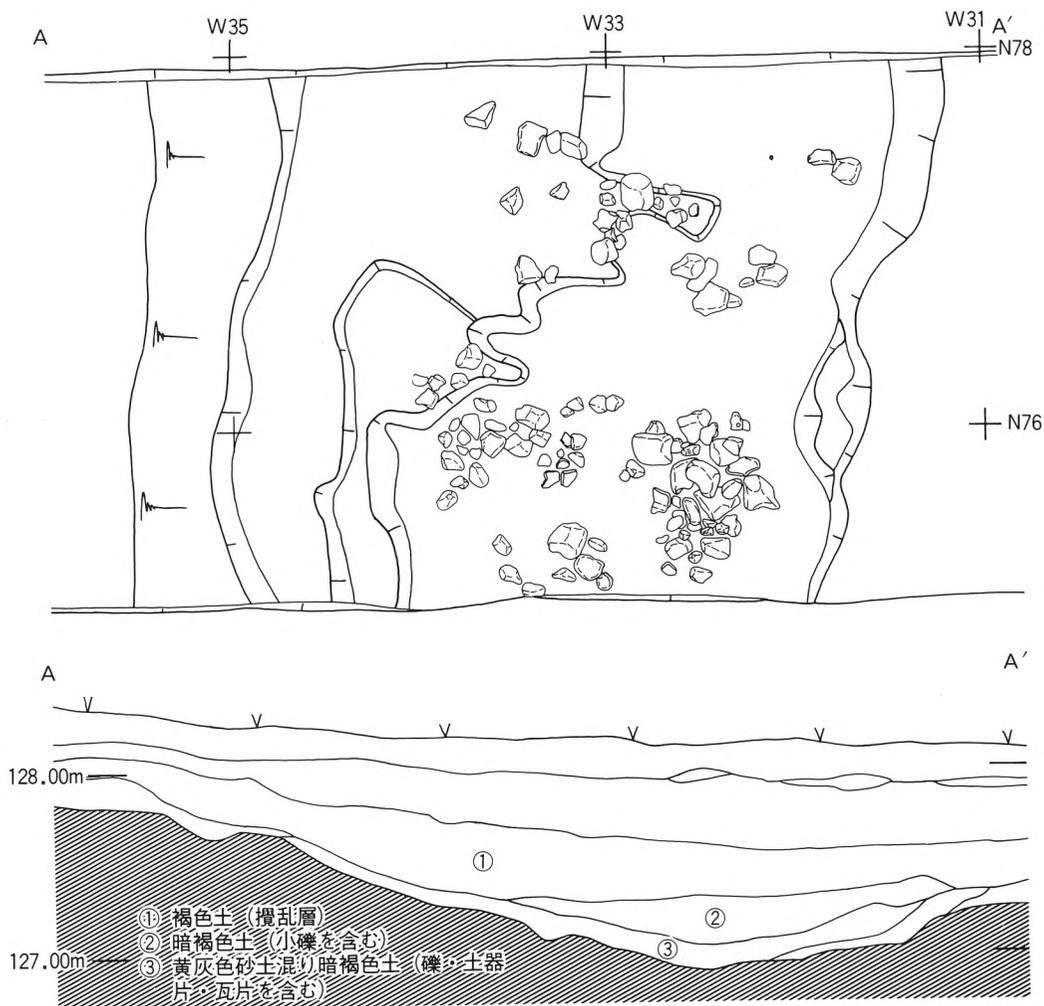


Fig. 15 S D 09 c 1/40

いる。この溝は地山が東に向って下がっていく、地形の変化点に造られている。埋土は自然堆積状で、地山の砂土を含む暗褐色土を主体とし、底部近くには5~20cm大の礫・瓦小片・中世の土器片を多く含んでいる。この北東のN80~86・W27~30でも、南西から北東への同様の素掘りの溝(S D 09 b)が検出されている。この東岸部は、ほぼ並行して造られている上部幅約100cmの小溝(S D 17)に切られている。その位置と形状からS D 09 bはS D 09 cの北側の延長部分であると判断でき、また第20次(西)調査で検出されたS D 09の南西への延長部に当たるものとみられる。砂質土状の黄褐色土で埋まるが、これには小礫・瓦小片が混じっている。流水・滞水の痕跡は認められない。出土する遺物から中世のものと判断される。

SK105 調査区の東端N72~76・E8~11で、素掘りの方形土壇が検出された。南北360cm・東西260cm以上で、検出面からの深さは約40cmである。この内部に暗褐色土とともに5~20cm大の

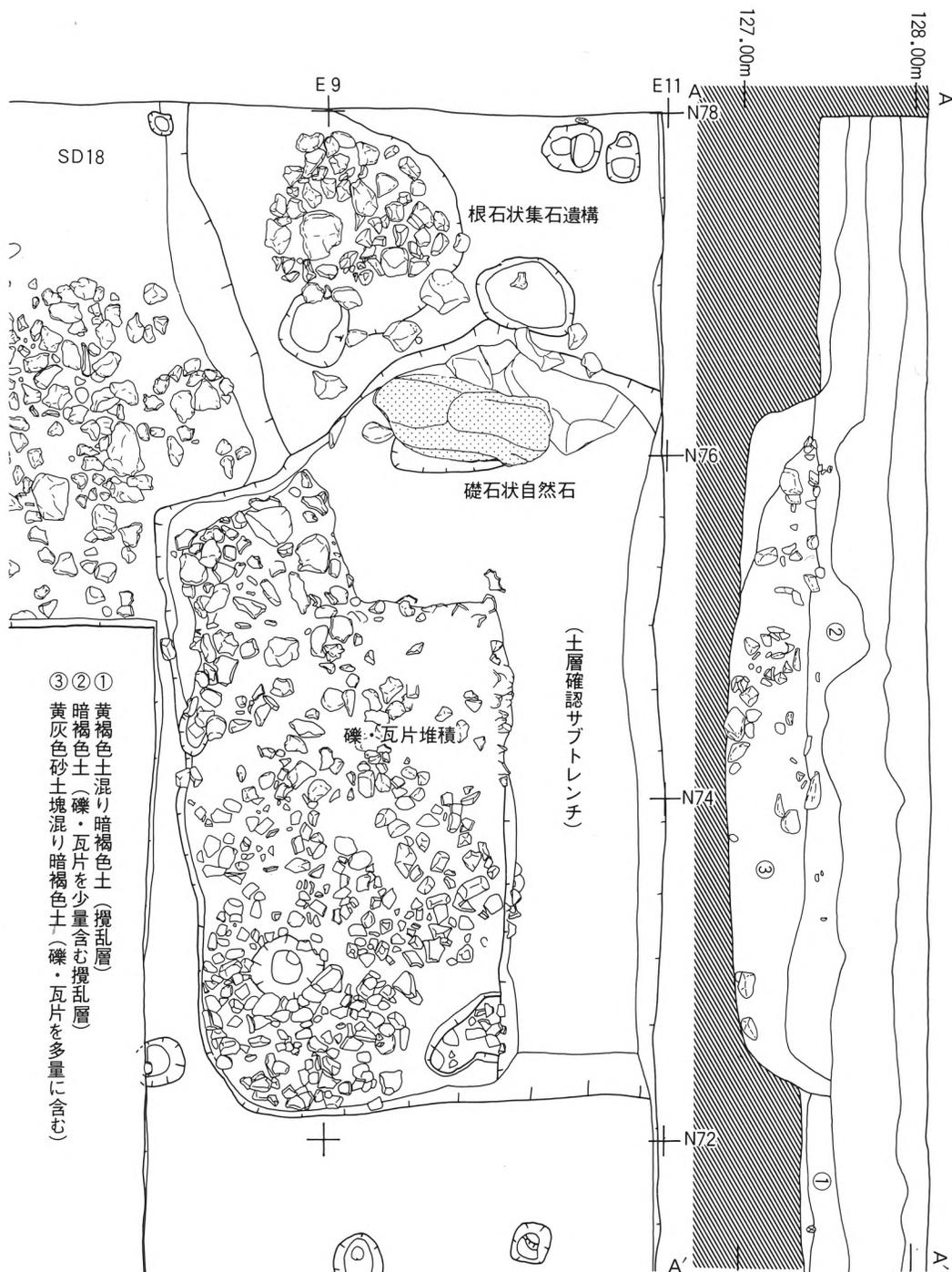


Fig. 16 S K 105 1/40

礫が多量に投棄された状態が入っており、瓦片も多数混じっていた。この状況を観察すると、礫の入り方には粗密があって乱雑であり、また瓦片は小片で不規則に入っていることから、意図的な基礎地形といった様相は認められない。土壌本来の用途は不明であるが、礫・瓦片は不用物を窪地に投入したものとみられ、混入物から近世になされたものと推定される。この土壌の北端に

幅200cm・奥行き80cm程の半円形をした掘形があり、この中に幅100cm×高さ60cm×厚さ30cmの大きさで、一面が平坦な自然石が1個北側から南へ落ち込む状態であるのが検出された。その北東1mに径約100cmで皿形に掘られた中に、5～30cm大の礫が密に入った礎石根石状の集石遺構が検出されたため、講堂の礎石の1つかと見られた。しかし、この付近の地山を観察すると、その中には同質の自然石が入り込んだ状態であり、また根石状集石遺構には石臼の破片が混じっていたこと、南・北・西側に同種の遺構の存在が確認されなかったことから、これは直接講堂の遺構に関係するものではないと判断された。

S K 106 N 77～78・W 20～22で、素掘りの方形土壇の南西部分が検出された。検出面からの深さは約45cmで、底部は平坦である。埋土は地山の砂土を含む暗褐色土で、下部には径20cm前後の礫・板碑片、中世土器片が入る。時期は中世のものと思われるが、用途は不明である。このS K 106はN 78・W 22を中心にある方形土壇（S K 107）が埋められた後に、それを切って造られている。

これらの遺構以外には、S K 105の北西に接して検出された南北方向の溝（S D 18）がある。上部幅160～230cm・底部幅100～180cm・深さ約10cmの浅い皿状に掘られた溝で、灰褐色土の埋土中には5～20cm大の礫が多量に混じる。S K 105に切られており、また埋土の一部にはサクサクした土質の黄色砂質土が入っていた。位置と走向の方位、形状からみて第20次（西）調査で検出されたS D 09の南東への延長部分である可能性がある。N 75～76・W 4～6で上部がラップ状に開く円筒形の井戸遺構1基（S E 17）、N 104～106・W 27～29で同じ形状の井戸遺構1基（S E 18）が検出された。埋土の上層は灰褐色砂質土であり、径30cm大の礫・中世土器片などが混じる。完掘はできなかったが、形状と埋土、出土遺物は、第12トレンチ・第20次・第26次調査で検出された井戸遺構に類似しており、中世のものと思なされる。また地山の高くなるN 107～130にかけて、方形や円筒状をした土壇が多数検出された。埋土は地山の砂土塊を含むものであり、礫などを含む。以前に在った民家の庭にあたる部分であり、近世以降の生活に伴う工作物であると推定される。

第34次調査では、国分寺に直接関連する遺構は検出されず、これまでの寺域北半部の調査と同様の状況を確認するにとどまった。しかし第4・12トレンチ・第20次（西）・第26次調査を含めて、この区域では墓壇が確認されておらず、国分寺廃絶後の土地利用を知る上で、一定の所見を得ることができた。また寺域北西隅の第21次調査地の地山面と比較して、本調査区東端では200cm低くなっており、寺域北半部では旧表土および地山の流失と削平が相当に激しかったことを窺うことができた。

(2) 遺物

第34次調査では、瓦片・土器片・石造物が、整理収納用コンテナバット21個分出土した。出土状態は散発的であり、またほとんどが小破片である。

表土層中から出土した球状土製品 (Fig. 17—①) は、緻密な作りで、表面には黒色塗料が塗られている。一面を平坦にし、その中央に球の半ばまで達する穿孔がなされている。他に類例を確認することができず、用途・時期ともに不明である。

方形土壙 S K 106の埋土中から、土師質土器皿、鍋形土器の破片とともに板碑が2点出土している。1点は小型のもので完形である。一端を圭頭状に、他の一端を尖らせているが、碑面は粗雑な仕上げで、刻字・刻画は施されていない。もう1点は冴ない冴片で、上端は圭頭状に作り、碑面には阿彌陀如来を示す梵字「キリーク」の上半部が残っている。近辺には墓壙は確認されておらず、土壙を埋め戻す際に投棄されたものとみられる。

方形土壙 S K 105の埋土中には、夥しい量の礫とともに瓦小片が多数入っていた。この中には軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦の小破片が混じっていたが、これらは土壙を埋め戻す際に投棄されたものとみられる。これら以外に、S D 09 b・cの埋土、S E 17・18の埋土中などからも土器片・瓦片・石造物が出土しているが、国分寺に直接関係する顕著な遺物の出土はなかった。

Table. 6 第34次調査区出土遺物 (Fig. 17)

番号	出土位置	種類	法 量 (mm)			胎 土		焼 成	色 調	成形・調整・その他	図版番号
			口 径	底部径	高 さ	素 地	挟 雑 物				
①	N75・W30 付 近	球 状 土 製 品	最大径 51	21	44	やや粗	砂粒を含む	硬 質	赤褐色、黒色の塗料が一部残存	粘土塊を手捏ねして球形につくり、錐状の工具で半ばまで穿孔する。	PL. 15-4
②	S K 106 埋 土	板 碑	最大長 42	最大幅 156	最大厚 24	—	—	—	—	ほぼ完形であるが、銘文の彫り込みはない。	
③	S K 106 埋 土	板 碑	最大長 (321)	最大幅 257	最大厚 28	—	—	—	—	1/3程度の残欠。梵字「キリーク」を刻字する。	15-5
④	S K 105 埋 土	軒 平 瓦	—	—	—	やや粗	白色鉱物細粒を多く含む	硬 質	黒灰色	小破片	
⑤	S K 105 埋 土	軒 平 瓦	—	—	—	やや粗	石英、灰色鉱物粗粒を含む	硬 質	外面灰色 断面暗灰色	小破片	
⑥	S K 105 埋 土	軒 平 瓦	—	—	—	やや密	石英、雲母粗粒を多く含む	硬 質	外面黒灰色 断面暗灰色	小破片	
⑦	S K 105 攪 乱 層	軒 平 瓦	—	—	—	やや粗	白色鉱物細粒をやや多く含む	硬 質	黒灰色	小破片	

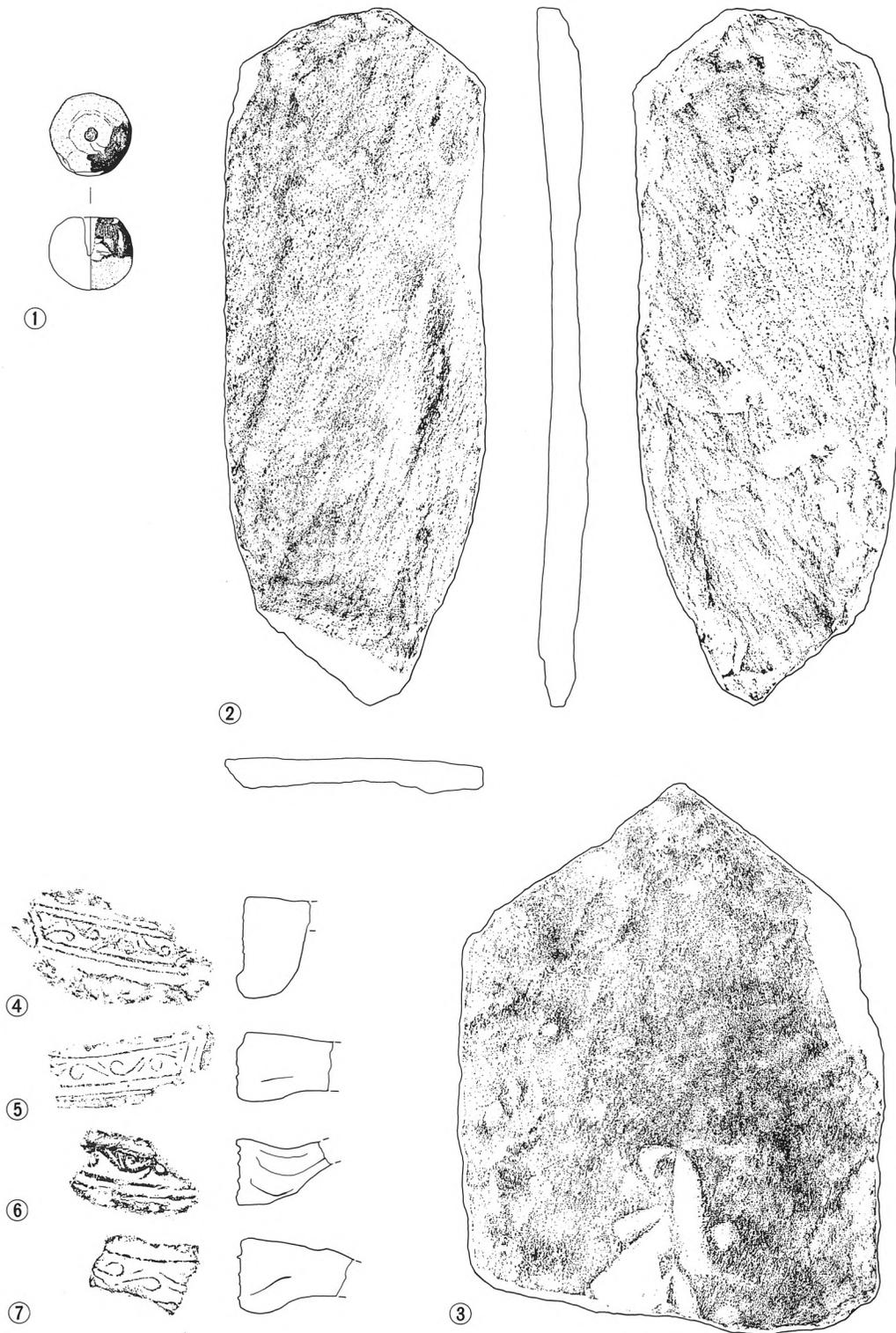


Fig. 17 第34次調査区出土遺物 縮尺1/4 ①表土 ②・③ S K 106 ④~⑦ S K 105

## V 文字瓦

今年度の第33・34次調査では文字瓦はいずれも小片の7点が出土したのみであるが、同時に進めた第19次調査（塔跡）・第25次調査（金堂跡）出土の瓦の洗浄・分類作業の過程で、約100点の文字瓦が確認された。押印には郡名ないし郷名を示すもの（①～④・⑥・⑦）、意味不明のもの（⑤・⑧）、ヘラ書きを伴うもの（⑨・⑩）がある。①・②は勢多郡を示し、同型のものが上西原遺跡（前橋市・旧勢多郡内）から出土している。⑥・⑦は佐位郡および同郡雀部郷を示し、同型のものが上植木廃寺（伊勢崎市・旧佐位郡内）から出土している。上植木廃寺ではこれ以外に、④・⑤・⑧・⑫・⑬も出土しており、国分寺との関連の強さを窺わせる。「罫」を押印した瓦は藤岡市金井地区の瓦窯跡から出土しており、同所で生産されたことがわかる。国分寺跡以外に山王廃寺跡などからも出土している。側のヘラ書きに「大」・「鬼」・「寺」など多種類があり、ほとんどが1文字である。これらは郡郷名を示すとは考え難く、負担体系というよりは造瓦の過程での符号ないしは担当者を示す略号の類とみられる。ヘラ書きには「成」（「武」）（⑪・⑫）と多胡郡武美郷を示すものがあり、「辛」（⑭・⑮）と同郡辛科郷を示すもの、また「六」（⑳）と同文が線刻された石製紡錘車が吉井町矢田遺跡から出土しているなど、多胡郡に関係するものが目立つ。「生」（㉑）「王」（㉒）は壬生氏を意味するものとみられる。

Table. 7 文字瓦 (Fig. 18)

番号	内 容	種 類	部 位	出土位置	備 考	図版番号
①	勢	押印（陰刻）	丸瓦凸面	25次表土		PL.16-1
②	勢	押印（陰刻）	平瓦凸面	25次表土		16-2
③	勢作	押印（陰刻・「勢」は左字）	平瓦凸面	25次表土	格子叩き文あり。2字目は「作」の可能性が強い。	16-3
④	山田	押印（陽刻）	平瓦凸面・狭端部近く	25次表土	下部を欠失。山田郡または同郡山田郷を示す。	16-4
⑤	子王	押印（陽刻）	平瓦凸面	25次表土	2字目は類例から「王」と判読。	
⑥	佐	押印（陽刻）	平瓦凸面	25次表土	斜格子叩き文あり。佐位郡または佐位郷、佐味郷を示す。	16-5
⑦	雀	押印（陽刻・左字）	平瓦凸面	25次表土	格子叩き文の下につく。佐位郡雀部郷を示す。	16-6
⑧	櫓	押印（陽刻・左字）	平瓦凸面	25次表土	斜格子叩き文の横につく。判読調査中。	
⑨	罫 逆	押印（陰刻） ＋ヘラ書き	平瓦凸面・広端部近く	25次表土	押印をし直す。その側にヘラ書きするが向きは異なる。	
⑩	罫 止	押印（陰刻） ＋ヘラ書き	平瓦凸面	25次表土	押印の側にヘラ書きするが、向きは異なる。	16-7
⑪	武秋□	ヘラ書き	平瓦凸面・狭端部近く	25次表土	下部を欠失。類例から「成」は「武」と判読。「武」は多胡郡武美郷を示す。	16-8
⑫	武諸	ヘラ書き	平瓦凸面	25次表土	下部を欠失。3文字以上の可能性あり。	
⑬	武□	ヘラ書き	平瓦凹面・狭端部近く 布目痕中	25次表土	下部を欠失。	16-9
⑭	辛 枕	ヘラ書き	丸瓦凸面・狭端部近く	25次表土	細く書く。「辛」は「辛」で、多胡郡辛科郷を示す。「枕」は「槐」。	16-10
⑮	辛	ヘラ書き	平瓦凸面・側縁近く	25次表土	下部を欠失。	
⑯	□子人	ヘラ書き	平瓦凸面	25次表土	□は「織」とみられる。4文字以上の可能性あり。	
⑰	生	ヘラ書き	平瓦凹面・布目痕中	25次表土	天地逆方向に書く。「壬生」を示すとみられる。	
⑱	王	ヘラ書き	丸瓦凸面	25次表土		
⑲	真	ヘラ書き	平瓦凹面・布目痕中	25次表土	左側を欠失。	
⑳	真	ヘラ書き（左字）	平瓦凸面・側縁近く	25次表土	右側を欠失。	
㉑	≡	ヘラ書き	平瓦凹面・狭端部近く	25次表土	瓦表面は黒色処理。	
㉒	井	押印（陰刻）	平瓦凹面	25次表土	瓦凸面には縄目叩き文が残る。2個以上押印される。	
㉓	○○○	押印（竹管）	平瓦凸面・狭端部近く	25次表土	瓦凸面には縄目叩き文が残る。竹管は6個分が残る。	
㉔	六	ヘラ書き	平瓦凸面	19次表土	吉井町矢田遺跡出土の滑石製紡錘車と同文が線刻されたものがある。	16-11
㉕	日	ヘラ書き	平瓦凸面・狭端部近く	19次表土		16-12

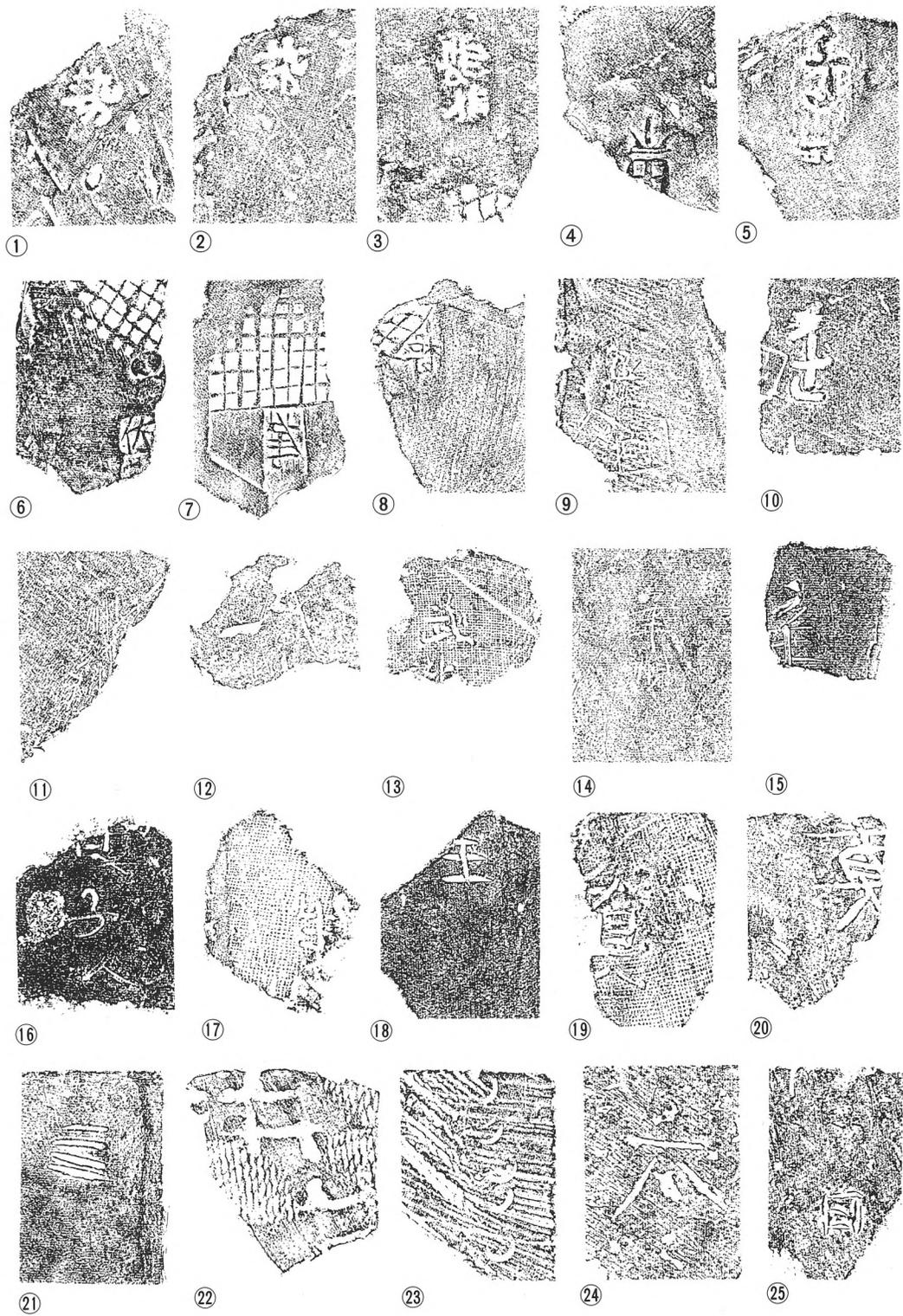


Fig. 18 文字瓦 縮尺1/3 ①~②③25次 (金堂跡) 出土 ②④・②⑤19次 (塔跡) 出土

## VI ま と め

寺域北半部の現地形の観察によると、N60から北側・W60から東側の、寺域の北半部中央西寄りから北東隅にかけて低くなっており、北西隅の墓地跡のみ周辺より80~100cm高い島状となっている。この区域の発掘調査の結果、寺域北半部は全域にわたって地山まで攪乱が及んでおり、国分寺存続期の表土層は残存していないことが確認された。また北西隅の墓地跡で確認された地山面との標高を比較すると、周辺では地山そのものが40~80cm削平されていることが明らかとなった。

上野国分寺は、長元3年(1030)に作成された「上野国交替実録帳」の記載内容から、1020年には金堂などの中心伽藍は比較的健全な姿を保っているものの、南大門などの諸門、周辺の築垣、僧房、雑舎などには既に滅失していたことが知られる。本尊である丈六釈迦仏などの諸仏像も破損したまま放置された状態であり、国司による修造は滞っていたようである。その後の記録として正応5年(1292)10月5日の関東御教書案で、上野等7ヶ国の「一宮・国分寺・宗寺社」に異国降伏御祈に精勤するよう命じている(『鎌倉遺文』第二十三卷所収)ことが知られる程度である。ただこの史料から直ちに、この時まで上野国分寺が維持されており、機能していたと判断することはできない。仮にそうであったとしても、金堂などごく限られた部分であったと考えられる。その後の状況を示すものとしては、金堂跡東側の土壙(SK02)から出土した宝篋印塔の基礎に刻まれた「至徳二年」(1385)の年号がある。これによって1300年代の第4四半期には、金堂基壇周辺に墓が造られるようになっており、この時期には既に国分寺の伽藍は壊滅し、その本来の機能も失われていたことは明らかである。

今回の第33・34次調査では、調査区のほぼ全域にわたって一辺20~30cmの方形柱穴が検出されたが、これは寺域北半部に共通する状況である。柱穴のあり方は不規則であり、数個が一直線上に並ぶものの、一棟の建物としてのまとまりを確定することは困難であった。重複状況などからみて、小規模な掘立柱建物が数回建て替えられたものとみられる。また井戸遺構が点在して検出されており、鍋形土器などの炊飯用具が多数出土していることから、国分寺廃絶後にこの一帯は居住地として使われていたことがわかる。これに対して金堂跡から南側では、方形柱穴・井戸遺構がほとんどみられず、北半部では第34次調査で2基検出されているのみの墓壙が多数存在していることを考え合わせると、寺地の南半部は墓域、北半部は居住域と区分されていたものとみられる。このような状況となった時期を、関越自動車道路線敷の国分僧寺・尼寺中間地域の調査成果を参照して調べてみると、寺域内の土壙・井戸遺構などから出土した内耳鍋形土器は14世紀末期から15世紀末期のものであり、土師質土器皿も同時期のものである。また墓壙周辺から出土した五輪塔・宝篋印塔などに刻字された年号をみると、全部で12点あるうち最も古いのが前述の「至徳二年」(1385)であり、最も新しいのは「永録八年」(1565)ととび離れているが、ほとんどが応永~永享年間(1394~1440年)のものである。この2種類の資料から、14世紀後期に墓壙が造られ始め、それとほとんど時期を同じくして居住地化が始まったこと、15世紀代は区域を分けて両者が併存し続け、16世紀になると墓壙造りはほとんど停止されるようになった変遷を窺うこと

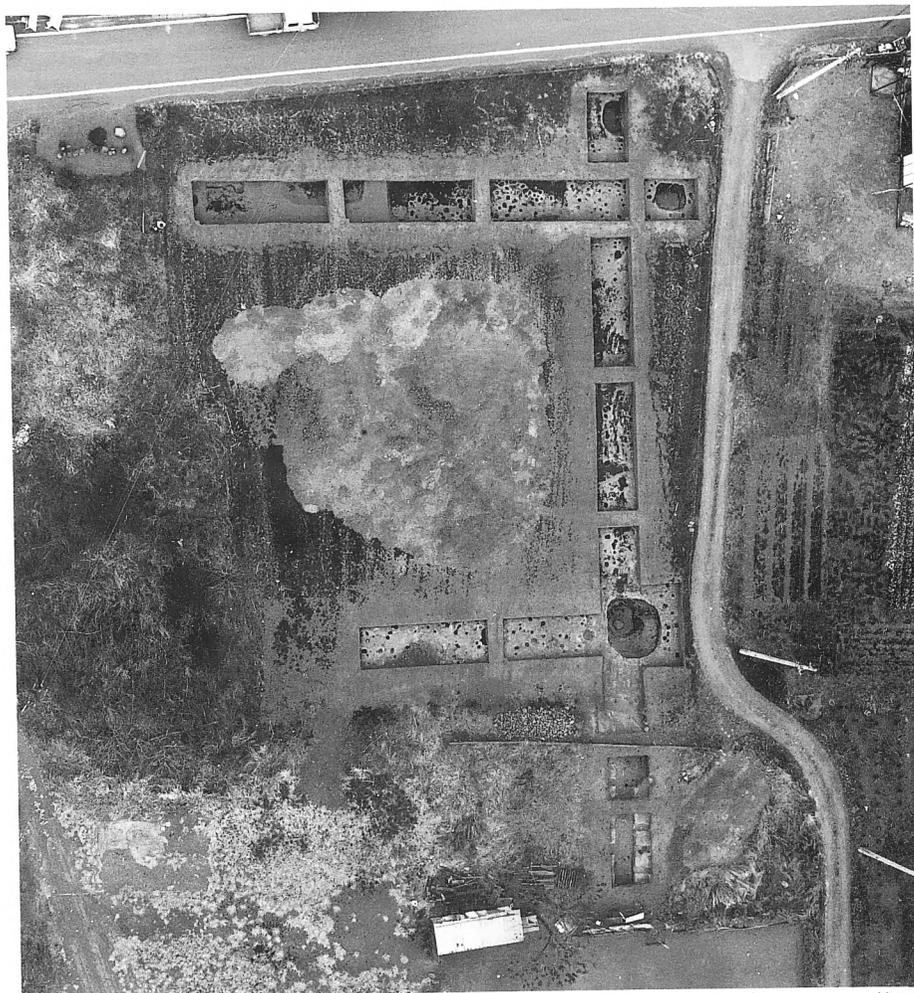
ができる。

第33次調査のS K 103から出土した多数の土師質土器皿は、寺域南半部の墓壙から出土するものと同質・同型であり、第15トレンチ拡張調査で出土した小型の皿の内面に輪宝と梵字「ア」が墨書されていたこと（「概要」5を参照）を考慮すると、この種の皿は葬礼および仏教儀式に多用されたとみることができる。こうしたことと墓域と居住域の存続期間がほぼ同一であることを考えると、これらは同一の集団によって営まれていたことが想定できる。この点について木津博明氏は、国分僧寺・尼寺中間地域で検出された堀と土塁で囲まれた方形区画の中央部に瓦葺きの基壇建物をもつ、寺院と推定される遺構との関連に注目し、これが14世紀後半から16世紀前半のものであること、その時期は現前橋市元総社町に本拠を構えた長尾氏が活動した時期にあたることから、在地勢力—菩提寺—墓域・家臣団居住地の関連を想定している（巻末参考文献の木津論文・国分僧寺尼寺中間地域報告書および口頭でのご教示による）。S K 103から出土した丸瓦（Fig. 11—①）は、方形区画内から出土した瓦と同質のものであり、両者の関連性を示すものである。また国分寺跡北側に隣接する東国分の集落北端から出土した、「応永十七年」（1407）の年号と上野守護代である長尾憲明が大旦那となって「上野州群馬郡府中妙見寺」に寄進したものである旨の銘文をもつ梵鐘にも注目される。15世紀の初めに、この近辺に妙見寺があったことを示すものである。現在、国分寺跡のすぐ南西に妙見寺があり、史料上でも天治2年（1125）の『僧妙達蘇生注記』には10世紀中期に上野国内に妙見寺が在ったことが記されている。当時の妙見寺がどこに在ったかは確認されていないが、国分寺の付近にそれを中心とする仏教活動があったことは確実であり（巻末参考文献の西垣論文を参照）、国分寺域内で検出される遺構、遺物との関連を検討していく必要がある。

次に調査の結果から想定できる、寺域北半部の地形の変化について触れておく。第20次調査では現地山面上で、北西から南東に向う流水の痕跡とこれによる砂礫の堆積のあるのが確認され、寺域内が流水の影響を受けたことがあるのがわかった。推定東大門の西側では、ローム面上に瓦片と川砂が散布し、その状況から北西から南東に向って流水のあったことがわかったが、その上には風成とみられる黒色土が堆積し、その上面には浅間B軽石の純層堆積が確認された。このことから、寺域内でも場所によっては12世紀初頭以前にも流水の影響を受けていたことが明らかとなった。寺域北半部は金堂・塔の建立された中央部に較べて、もともと低い地形であったとみられ、それが榛名山東南麓の大雨などによる出水のため表土の一部を流失するようになっていたと考えられる。そうした土地を居住地として使うのに際して、寺域中央部を北から南に向う大溝（S D 02）、第34次調査で検出されたS D 09などが排水路として設けられたのではないだろうか。寺域北西隅にあった墓地は18世紀初頭以来のものであり、このみ地山が島状に高く残っている理由は墓地であったことに求めることができるが、そうすると周辺が地山まで削平されたのは18世紀以降ということになる。東国分の集落の溢水を防ぐための所業であった可能性が考えられる。



調査区全景空中写真



1. 第33次調査区  
全景



2. 第33次調査区調査  
前状況（西から）



1. 第33次調査区 E 117~120トレンチ (南から)



2. 第33次調査区 N 110~113トレンチ (西から)



1. 第33次調査区 N80~83トレンチ検出状況 (西から)



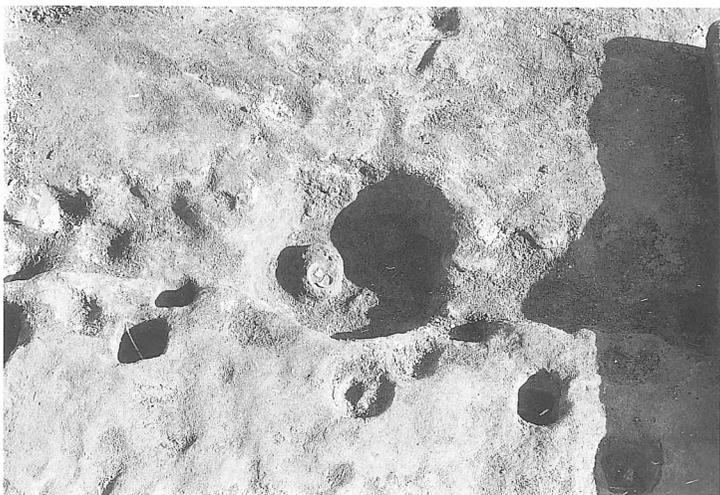
2. 第33次調査区 N110~113・E110~120検出状況 (西から)



1. 第33次調査区  
S K 101検出状況  
(西から)



2. 第33次調査区  
S K 102検出状況  
(西から)



3. 第33次調査区  
N 81・E 116墓壙検出  
状況 (西から)



1. 第33次調査区  
S K 103検出状況  
(西から)



2. 第33次調査区  
S K 103埋土状況  
(南から)



3. 第33次調査区  
S K 103 磔・土器出土  
状況



1. 第34次調査区全景



2. 第34次調査区調査前状況 (南から)



1. 第34次調査区全景 (南から)



2. 第34次調査区全景 (東から)



1. 第34次調査区 W27~30トレンチ検出状況 (南から)



2. 第34次調査区 N75~78トレンチ検出状況 (西から)



1. 第34次調査区 S D09 b 検出状況 (西から)



2. 第34次調査区 S D09 c 検出状況 (南から)



1. 第34次調査区 S K 105 検出状況 (南から)



2. 第34次調査区 S K 105 礎石状自然石出土状況 (南から)



1. 第34次調査区 S K 106 検出状況 (南から)



2. 第34次調査区 W27~30  
N100~130 検出状況 (南から)



1. 33次 S K 103 土師質土器皿 (中型)



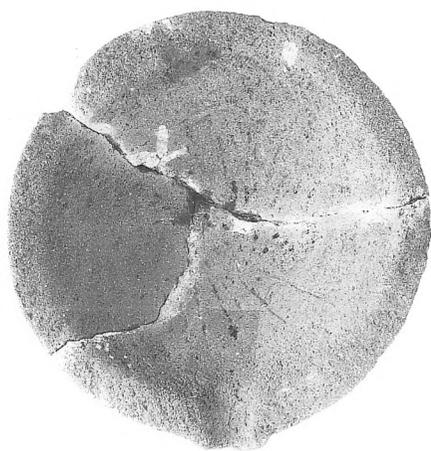
2. 33次 S K 103 土師質土器皿 (小型)



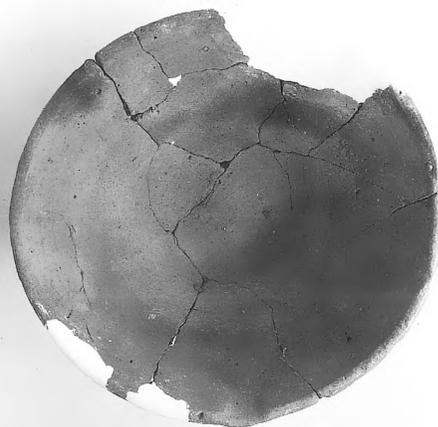
3. 33次 S K 103 土師質土器皿  
底部に墨書「十」



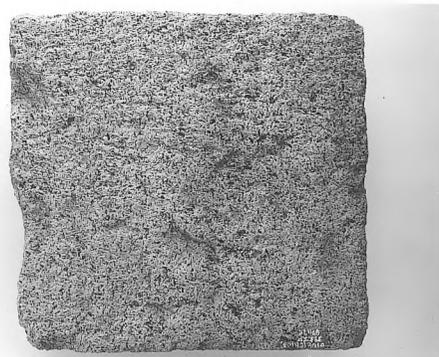
4. 33次 S K 103 土師質土器皿 (小型)



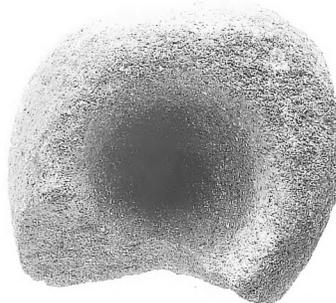
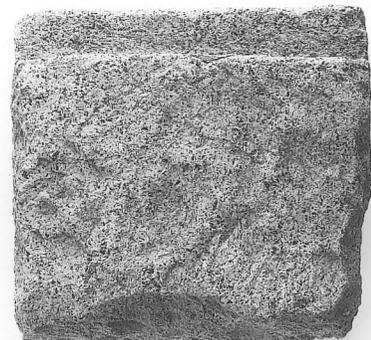
1. 33次 S K 103 石製搗鉢



2. 33次 S K 103 軟質陶器搗鉢



3. 33次 S K 103 角閃石安山岩板石  
(上) 表 (下) 裏

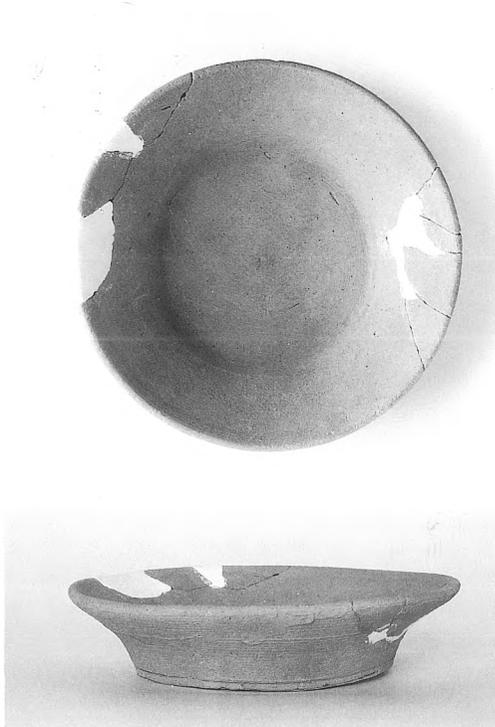


4. 33次 S K 103 凹石





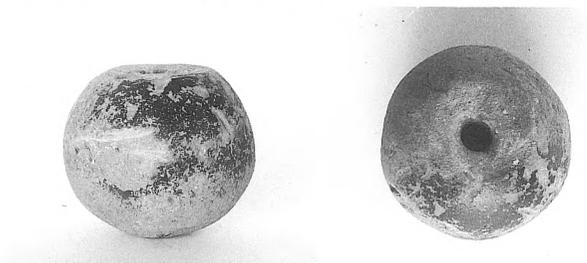
1. 33次 S K 108 土師質土器皿 内面に  
墨書「由尔」カ



2. 33次 N 81・E 116 墓壙 土師質土器皿



3. 33次 S K 101 内耳鍋形土器



4. 34次 表土 球状土製品



5. 34次 S K 106 板碑(部分)  
(上)表 (下)裏



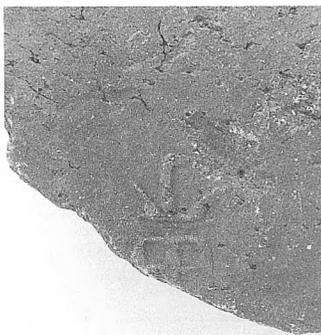
1. 25次表土 押印「勢」



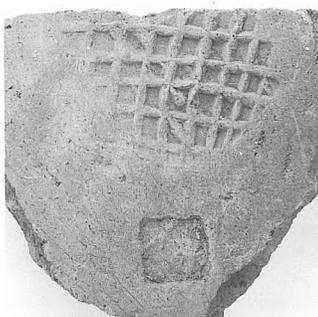
2. 25次表土 押印「勢」



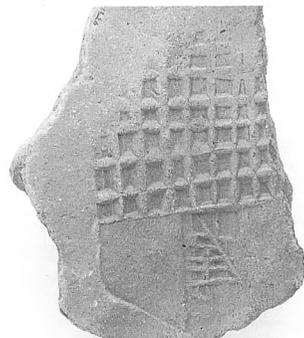
3. 25次表土 押印「勢作」  
(「勢」は左字)



4. 25次表土 押印「山田」



5. 25次表土押印「佐」



6. 25次表土押印「雀」(左字)



7. 25次表土押印「圀」「止」



8. 25次表土「武秋□」



9. 25次表土「武□」



10. 25次表土「辛槐」



11. 19次表土「八」



12. 19次表土「日」

## 参 考 文 献 (近年刊行の上野国分寺関係の論文・報告書など)

- 北島信一「遺跡出土の文字資料にみる八～十世紀の表記文化の特色—書道史の立場からの分析—」  
信濃 第38巻6号 1986年
- 関口功一「平安中期上野国の一様相—群馬郡の分割をめぐる二つの史料—」 群馬県史研究 25  
1987年
- 西垣晴次「山麓の宗教—妙見縁起をめぐる—」 『山麓文化の地域生態』所収 群馬大学教育  
学部 1987年
- 黒坂周平「東山道調査の進行と成果—「長野県東山道研究調査会」の結成と当初の実績について  
—」 信濃 第39巻5号 1987年
- 木津博明「上野国府中妙見寺「應永十七年」在銘梵鐘考」 群馬文化 213 1988年
- 佐藤宗諄「広がる文字文化」 『図説検証原像② 生活と習俗 大地に根づく日々』所収 旺文  
社 1988年
- 前沢和之「瓦に遺された歴史 上野国分寺跡出土の文字瓦から」 群馬風土記 1988年3月号  
「国分寺跡」「国分尼寺跡」 『日本歴史地名大系10 群馬県の地名』所収 平凡社 1987年
- 子持村誌編さん委員会「古代上野国の政治と生活」 『子持村誌 上巻』所収 1987年
- 新田町誌編さん室「官衙と寺院の遺跡と遺物」 『新田町誌 第二巻 資料編(上)』所収  
新田町 1987年
- 伊勢崎市史編さん委員会「律令体制の展開と上植木廃寺」 『伊勢崎市史 通史篇1 原始古代  
中世』所収 1987年
- 群馬県史編さん委員会『群馬県史 資料編8 中世4 金石文』 1988年
- 群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『鳥羽遺跡 G・H・I区』 1986年  
同 『上野国分寺僧寺・尼寺中間地域(I)』  
1987年  
同 『下東西遺跡』 1987年
- 群馬町教育委員会『群馬町埋蔵文化財調査報告第19集 推定東山道』 1987年

## 調 査 関 係 者 (敬称略)

### 発掘作業

一倉ヤヨイ 入沢喜一 内山昭子 大塚みつゑ 金井もと江 菊地松之助 駒形邦子 田原義  
昌 塚田マサエ 塚田みさほ 塚田光代 塚田幸雄 仲野俊雄 蜂須賀トミ子 蜂須賀美栄  
原沢政雄 東野菊江 東野トクエ 東野ノブ子 柳原久仁江

### 整理作業

石原清和 大嶋町子 小沢美子 住谷宏之 田村葉子 塚田裕子 南郁枝

### 協 力

群馬町教育委員会 前橋市教育委員会 群馬町東国分地区 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

この他に住谷陽平(東国分区長) 住谷真一(農業委員) 住谷宗七ほか多くの方々のご協  
力とご指導を得た。

## 史跡上野国分寺跡発掘調査概要 8

印 刷 昭和63年3月25日

発 行 昭和63年3月30日

発 行 群馬県教育委員会

〒371 前橋市大手町1丁目1—1

T E L 0272—23—1111

編 集 群馬県教育委員会文化財保護課

印 刷 株式会社 前 橋 印 刷 所